

1 私を育てたあの時代、あの出会い

「まず生徒の気持ちを受け入れる」
生徒観を変えてくれた恩師の助言

長崎県諫早市立諫早中学校校長◎寺井雄一

特集

3 「学力保障」のために、移行期間の今できること 第3回

中学校導入期に
学習習慣を定着させる

4 課題整理

中学入学後に大きく変わる
学習習慣や学習態度

6 対談

「授業で習う」から「自ら学ぶ」に
学習習慣を早期に転換東京都江戸川区立南葛西中学校校長◎茅原直樹
東京都檜原村立檜原中学校校長◎淵上勝則

10 実践事例 1

入学プレテストと春休み課題で
学習習慣を定着させる

東京都狛江市立狛江第三中学校

16 実践事例 2

入学前後の2回の合宿で
新入生を「中学生にする」

石川県羽咋市立羽咋中学校

22 実践事例 3

春休みの課題と確認テストで
学習習慣の乱れを防ぐ

佐賀県嬉野市立塩田中学校

27 実践事例 4

小学校時代から中学生の学習習慣を
身に付ける「ジョイントプログラム」

京都府京都市教育委員会・京都市立京都御池中学校

32 読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

*本文中のプロフィールはすべて
取材時のものです。

また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製及び転載を禁じます

「まず生徒の気持ちを受け入れる」 生徒観を変えてくれた恩師の助言

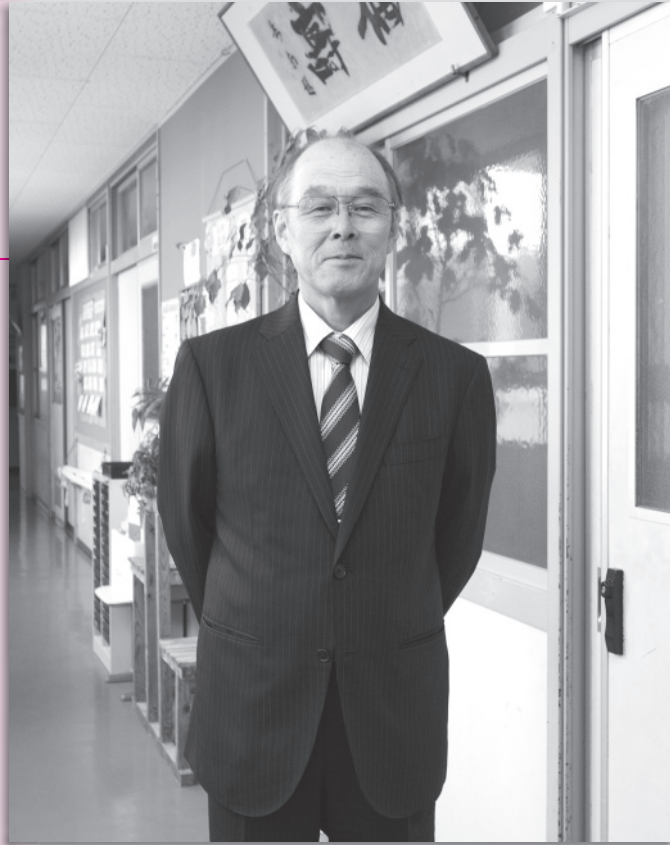
長崎県 諫早市立諫早中学校校長 寺井雄一 TERAI YUICHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、寺井校長が語る。

辞職を覚悟した私を
諭し、守ってくれた

30代後半の頃に赴任したのは、荒れている学校でした。離島での勤務が長く、比較的素直な生徒に接してきた私にとって、生徒が授業中、教室に入らず、校舎の隅でたむろしたり、隠れてたばこを吸っていたりする光景は衝撃でした。生徒指導の難しさから担任の持ち上がり希望しない教師が多いこともあり、赴任1年目から3年生の担任を任せられました。授業だけでなく、生徒と一緒に部活や特別活動に取り組み、感性を共

有したいと考えていましたが、それ以前の指導で手一杯な状況でした。「なめられたら終わりだ」という気持ちで、問題行動を見つけては厳しく指導する、戦いのような日々が始まりました。ところが、生徒にも「教師になめられたくない」という意地があり、対立は深まるばかり。そんなある夜、自宅に電話がありました。問題行動が目立っていた生徒の兄貴分という卒業生からで、「明日、お前をやっつけに行く」と脅されたのです。「やれるものならやってみろ！」と言い返して電話を切った後、学校に迷惑がかららないよう



てらい・ゆういち 小学校時代に会った先生の優しさや配慮の深さに感激し、教師を志す。旧厳原町立厳原中学校、諫早市教育委員会学校教育課課長などを経て、2007年、諫早市立諫早中学校に校長として赴任。専門は英語。

1974 (昭和49)
厳原町立厳原中学校
(現対馬市立厳原中学校)
に赴任

1989 (平成元)
時津町立時津中学校に
赴任。
森内清校長と出会う



1990年に「狸会」で
旅行した際の1コマ。
最前列中央、スーツ姿の
男性が森内校長

1998 (平成10)
諫早市立長田中学校に
教頭として赴任

2001 (平成13)
外海町立神浦中学校
(現長崎市立神浦中学校)
に校長として赴任

2003 (平成15)
諫早市教育委員会
学校教育課課長に就任

2007 (平成19)
諫早市立諫早中学校に
校長として赴任

に辞表を書き、家族に「教師を辞めるかもしれない」と伝えました。

翌朝、覚悟して学校に行き、森内清校長に報告しました。親分肌の森内校長は、慌てるそぶりを少しも見せず、「お前は短気かもんなあ。落ち着いてよく考えろ」と諭してくださいました。その一言で、興奮していた私の体からふっと力が抜けたのです。卒業生は学校に來ましたが、森内校長が先生方に「寺井を守れ」と指示し、学校全体で対応したことにより大事には至りませんでした。

教師の一生懸命さや 熱い思いが生徒を動かす

最初の1年間で、生徒に対して存在感を示せましたが、満たされない気持ちが残りました。生徒との深いつながりを感じられなかったからです。森内校長は私が悩む姿を見て、生徒を力で抑え込むのではなく、まずは受容的な姿勢を見せることの大切さを事あるごとに助言してくださいました。生来の短気は急に治りませんから、指導がすぐに変わったわけではありません。しかし、生徒を叱ろうとした時は常に森内校長の教えを思い出し、「まずは話を聞こう」

と一拍置くようにしました。すると、問題行動の多い生徒の素直な部分も見えるようになり、根っから悪いわけではなく、エネルギーを持って余しているだけなのだ、見方が変わっていききました。

森内校長は常々、「教師が一生懸命になる姿や熱い思いを生徒に伝えることが大切だ」とも話されていた。その教えを体現できたと思えたのが、二度目の3年生担任となった合唱コンクールの指導です。私も生徒の輪に入って共に練習に打ち込み、力と力ではなく、心と心で生徒と向き合いました。優勝ではありませんでしたが、誰もが充実した時間を過ごせたと感じました。

その年の卒業式後、教室に戻った時のことです。先に教室に入っていた生徒たちは整列していて、私が入ると一斉に合唱コンクールの歌を歌い始めたのです。生徒とのつながりを取り戻せた、教師をやっている本当に良かったと、心から実感した出来事でした。

私の座右の銘であり、先生方にもよく話すのが、宋名臣言行録にある「寛にして畏れられ、厳にして愛せらる」。教師は生徒に対して、管

教師は『寛にして畏れられ、

厳にして愛せらる』



理職であれば他の先生方に対して、寛容さと厳しさの両方が求められると考えます。この言葉を想起する時、森内校長の姿をよく思い出します。どっしりと構えて小言は言わず、時おり、急所を突くような厳しい指摘をされる。その存在自体が誰からも畏れられ、愛される校長でした。森内校長の風貌にちなみ、「狸会」という年1回の懇親旅行が、20年以上前から、先生が逝去された今も続いています。

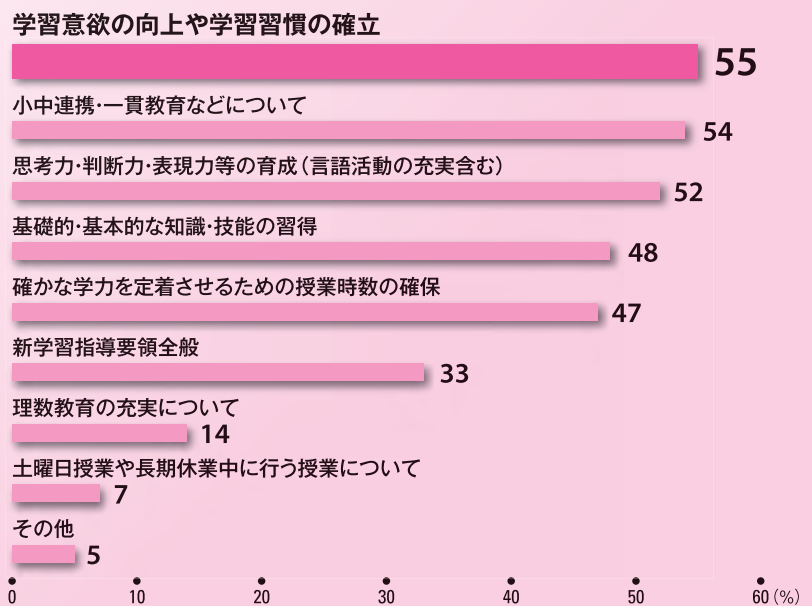
昔に比べ、生徒や保護者との関係づくりなどに難しさを感じることも増えました。私の若手時代より今の若い先生の方が気苦労が多いかもしれません。そんな今だからこそ、時代の流れには乗り遅れず、しかし振り回されない。大きな視点を持ちつつ、森内校長のように先生方を温かく包み込み、誰もが心おきなく本気で生徒と向き合い、「教師ほど素晴らしい仕事はない」と実感する学校をつくりたいと思っています。

中学校導入期に 学習習慣を 定着させる

確かな学力を身に付けるために、中学生らしい学習習慣をいかにして定着させるかは、中学校の課題の一つだ。今号では、解決のための一つのアプローチとして、中学入学前後の導入期指導を取り上げ、現職校長の座談会や、実践事例から解決法を紹介する。

Q

新課程の実施に向けて取り組んでいる、校内研究・研修・実践の内容は？



「今年度、新学習指導要領に対応した校内研究・研修あるいは実践を行っていますか」という設問に「行っている」と答えた方に対し、8つの選択肢を提示。あてはまるものすべてを選択

*「VIEW21」中学版読者へのアンケート結果より。アンケートは2010年6月に実施。用紙を郵送し、ファクスで回収。有効回答数は87

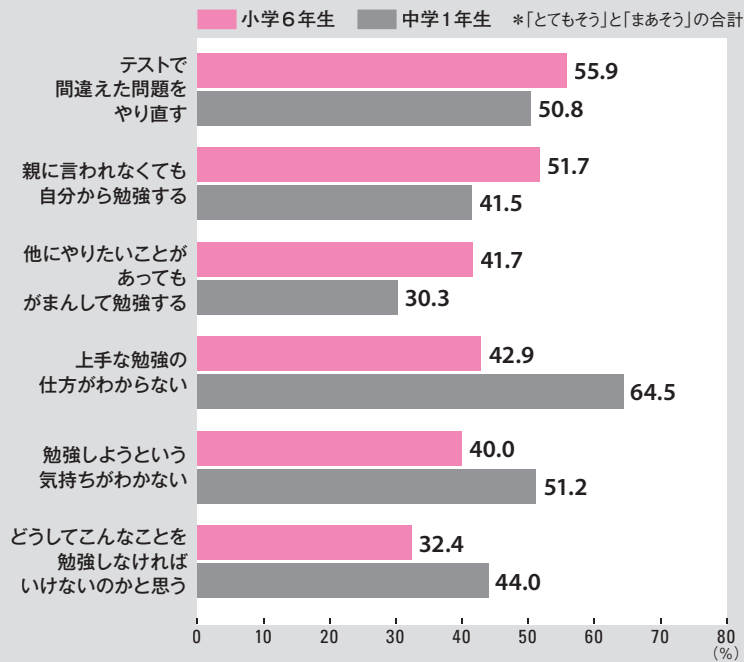
中学入学後に大きく変わる 学習習慣や学習態度

しっかりと学習習慣を中学校生活の導入期に定着させられるかどうかは、その後の3年間の指導の成否を左右する重要なポイントだ。ところが、中学入学を境に生徒の学習習慣や態度は大きく変化している。

データから見る課題

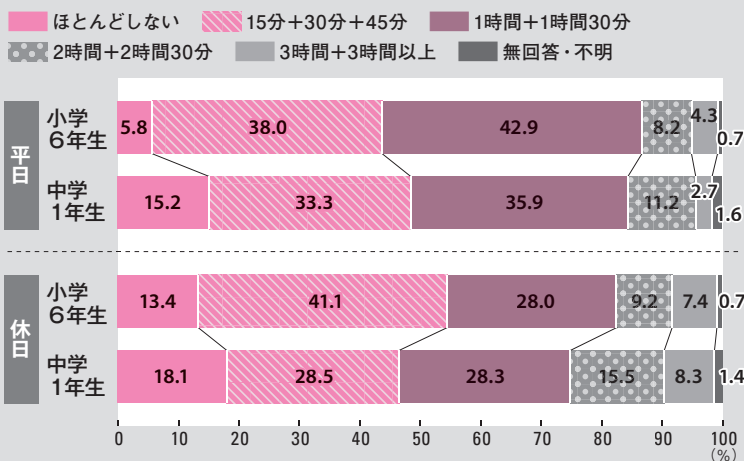
中学校段階でギャップが生じる学習習慣や学習意欲

Q あなたは勉強の取り組み方について、次のようなことがあてはまりますか



学習時間の格差も中学校段階で拡大

Q あなたはふだん家でどれくらい勉強していますか



出典/第2回子ども生活実態基本調査

調査時期◎2009年8~10月

調査方法◎学校通しの質問紙による自記式調査

調査対象◎小学6年生 1,207人、中学1年生 1,321人

★詳しくはベネッセ教育研究開発センターのウェブサイトをご覧ください。

<http://benesse.jp/berd/>

中学校**導入期**に**学習習慣**を定着させる

先生方が感じる導入期指導の必要性

春休みに学習習慣・生活習慣が乱れてしまわないよう、小・中学校が連携した取り組みが求められる

オリエンテーションや合宿の機会を生かし、中学校での学び方や生活スタイルなどを早期に指導し、仲間意識を育みたい

入学後の出来るだけ早いタイミングでテストを実施するなどして、生徒一人ひとりの学力を把握しておきたい

生徒が「変わろう」という意欲を持っているうちに、「習う」と「学ぶ」の違いを意識させ、自ら主体的に学ぶ学習姿勢を身に付けさせたい

対談 ▶ P.6

事例に見る解決のヒント

1

空白期間になりがちな春休みに課題を出す

狛江市立狛江第三中学校 ▶ P.10 羽咋市立羽咋中学校 ▶ P.16
嬉野市立塩田中学校 ▶ P.22
京都市教育委員会・京都市立京都御池中学校 ▶ P.27

2

入学前後に2回の合宿を実施

羽咋市立羽咋中学校 ▶ P.16

3

入学前や入学直後のテストで新入生の学力を把握

狛江市立狛江第三中学校 ▶ P.10 羽咋市立羽咋中学校 ▶ P.16
嬉野市立塩田中学校 ▶ P.22
京都市教育委員会・京都市立京都御池中学校 ▶ P.27

4

導入期に身に付けた学習習慣を継続的にフォロー

狛江市立狛江第三中学校 ▶ P.10
京都市教育委員会・京都市立京都御池中学校 ▶ P.27

「授業で習う」から「自ら学ぶ」に 学習習慣を早期に転換

新入生にどんな学習習慣を付けさせたいのか。そのためにはどのような取り組みを講じるべきなのか。小学校の学習スタイルとの違いや、ガイダンスの機能、定期テストの役割など、学習習慣を定着させるための方法について、2人の校長先生にお話を伺った。

「習う」と「学ぶ」の違いを 意識させる

——中学生として身に付けてほしい学習習慣をどのようにお考えですか。また、それを身に付けさせるために、入学初期の段階ではどのような指導をしていますか。

茅原 中学生に必要なのは、「習う」と「学ぶ」ことの違いを意識した学習姿勢だと思います。小学校までは授業で「習う」ことが学習の中心ですが、中学校では、授業で分からなかったことや自分に足りないことを、自ら「学ぶ」姿勢なくして学力は向上しません。

しかし、指導はなかなか難しいのが現状で

す。学力は入学段階で二極化していますし、学習習慣が定着していない生徒の方が多数を占めます。しかも、私が勤務する南葛西中学校のある江戸川区は、学校選択制を採用しています。本校の場合、2010年度は七つの小学校から入学しており、多種多様な学校教育を受けてきた生徒が混在しています。一斉授業の場で、単に「勉強してきなさい」と指示するだけでは、生徒は学びに向かわないのです。

だからこそ、「鉄は熱いうちに打て」というように、中学校に入学したばかりで、生徒が「変わるう」という意欲を持っているうちに、それに応えるような取り組みを講じることが重要です。本校では、各教科の最初の1

時間を、小学校との学習方法の違いや家庭学習の方法を伝えるガイダンスに充てています。加えて、家庭学習の成果が表れやすいような小テストを実施するなどして、「努力は報われる」という達成感をまずは持たせることを重視し、導入期ですぐに意欲を失ってしまわないように配慮しています。

洲上 授業で学んだことの見直しや、各教科で出された宿題に毎日、一定時間を充てて取り組むこと。これが中学生として最低限必要な学習習慣だと、私は考えています。

勤務する檜原村立檜原中学校では、「サブノート」を活用しています。授業で学んだことをもう一度まとめたり見直したりして、一冊のノートにファイリングしていくもので

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第3回

中学校導入期に学習習慣を定着させる

東京都江戸川区立南葛西中学校校長

茅原直樹

かやはら・なおき◎江東区立深川第七中学校、墨田区教育委員会事務局指導室統括指導主事などを経て、現職。
江戸川区立南葛西中学校◎東京東部の臨海地区に立地。学校選択制の下、過去3年間は7つの小学校から新入生が入学。生徒数は約380人。



東京都檜原村立檜原中学校校長

淵上勝則

ふちがみ・かつのり◎東大和市立第四中学校、東大和市立第五中学校教頭等を経て、現職。
檜原村立檜原中学校◎東京西部に位置する檜原村は、島嶼部を除いて東京都で唯一の村。村立の小学校、中学校は各1校。2011年度から小中一貫教育を行う予定。生徒数は51人。



す。先ほど茅原先生が言われたように、今の生徒はただ「しなさい」と言っても取り組まない、宿題をプリントにして用意するなど、最初はある程度手をかけながら、学習習慣の定着を図っています。

また、南葛西中学校のように、本校も入学時にガイダンスを行い、「小学校の学習方法のままでは中学校の授業にはついていけないよ」と伝えます。

——小学校との学習スタイルとの違いという点では、定期テストに向けた勉強も中学校に入って初めての経験となります。

淵上 私は、定期テストに向けて計画的に学ぶことが、中学生らしい学習姿勢を身に付けるために重要なことだと考えています。小学校のように単元が終わったら即テストという流れではなく、複数の単元を見通した上で、どこをどのくらい勉強すればよいか、自分で計画的に考えて学習する力が、テスト勉強の過程で身に付くと思うからです。また、以前学んだ単元を忘れていないか、自分で学び直す力も必要です。

授業時間を確保するために、1年生1学期の中間テストを行わない学校が増えていると聞きましたが、本校では中学校の学習スタイルを体験させる重要な行事として中間テストを位置付け、5月末の実施を堅持しています。一定のテスト範囲について、自分で計画し、学習して、テストで確認し、答案が返ってきたら復習するというサイクルを出来るだけ早く体験させるためです。このサイクルに基づいた学習習慣を続けることが、最終的には高校入試対策にもつながると考えます。

また、南葛西中学校のように、本校も入学時にガイダンスを行い、「小学校の学習方法のままでは中学校の授業にはついていけないよ」と伝えます。

——小学校との学習スタイルとの違いという点では、定期テストに向けた勉強も中学校に入って初めての経験となります。

単元レベルでの学力を早期に把握する

——ただ「勉強しなさい」と言うのではなく、学習方法を教えて支援することが求められるわけですが、個に応じた指導をするためには生徒の学力を詳細に把握する必要があります。新入生の学力をどのように把握していますか。

茅原 本校では、小学校から送られる指導要録の抄本を土台に、各教科の日々の授業を通して把握していきます。ただし、指導要録は三段階評価ですから、細かいところまでは分かりません。きめ細かく指導するためには、算数なら、図形が苦手なのか、それとも分数でつまづいているのか、そうした単元レベルでのデータが必要なのです。出来れば一人ひと



とりの学力を早い段階で知るために、入学直後にテストを行いたいと考えています。

測上 檜原村は、小学3年生から中学3年生まで、年1回、学力テストを実施しています。基礎的な問題が出来るかを確認し、7年間の学力の推移を把握するのが目的です。毎年4月中旬に行い、前学年の学習内容から出題します。

ところが、実施時期は早いのに、結果の第一報が返ってくるのは中間テストより遅い6月中旬です。もう少し早い時期に結果が出た方が、より活用できると思います。

茅原 定着度を測るテストは、子どもの学力の何が足りないのかを細かく把握し、次の手立てに生かすために非常に有効です。区の平均点と比べることによって、学校としてどこに力を入れるべきかが早い段階で分かります。そうすれば、年間指導計画にも生かされます。ただし、学校単独でのテストの実施は、作問や採点の負担から厳しい面があります。檜原村のように、自治体が一斉に行ってくればよいと思います。

入学直後の合宿は 学習・生活の両面で効果大

—— ガイダンス以外に何か有効な方法はありませんか。中学校入学前の春休みに中学校が宿題を課しているケースもあるようです。

茅原 良い取り組みだと思います。中学校で始まる学習に向けて、生徒は気持ちを新たに出来ます。ただし、どの学校にでも出来るかと言えば、そうではありません。例えば、本校のように比較的多数の小学校から生徒が集まるような学校では、入学前に宿題やプレテストを課するのは難しいのが現実です。むしろ、入学後の出来るだけ早いタイミングで、生徒一人ひとりの学力を把握できるような取り組みの方がよい場合もあるでしょう。

測上 入学前の課題は、学校の置かれた状況や、小中間の連携度合いによると思います。本校はここ5年ほど、小中連携に力を入れて

きましたが、そうした取り組みを実施するた
めにも、日頃の授業交流や研究会を通して、
相互の信頼関係を高めていくことが大切だと
感じています。小学校の信頼を得られるかど
うかが、まずは大切になります。

茅原 中学校独自の取り組みを考えるのなら
ば、合宿という方法もあります。以前、勤務
していた中学校では、入学式の1週間後に1
泊2日のオリエンテーション合宿を実施して
いました。中学校での学習方法や朝礼での並
び方などを徹底的に指導するのです。新入生
全員で同じことをするというプログラムは、
仲間意識を育む上でも効果的でした。入学当
初の「変わりたい」という子どもの意識とう
まく合致する取り組みだと思います。現任教
のある江戸川区には、適当な宿泊施設がない
のですが、何とか実施したいと考えています。

測上 生徒指導に課題を抱える東京都内のあ
る自治体では、3年ほど前にオリエンテー
ション合宿を始めました。そこでは学習習慣
を身に付けさせるために、徹底的に規律を守
らせて学習に取り組みさせるようです。余暇の
時間も読書させるほど徹底していると聞いて
いますが、こうした取り組みは生徒指導的な
側面からも有効です。

学校としての指導の統一と 9年間を見通した視座の共有を

—— 導入期の学習指導を充実させるために、

中学校導入期に学習習慣を定着させる

学校経営者としての校長には、どのような役割が求められるのでしょうか。

茅原 入学期に最低限指導してほしいことや生徒に守らせたいルールなどは、学年の教師任せにせず、学校全体で統一する必要があると思います。学校としての方針を示しておけば、担任の指導経験にかかわらず、新入生は皆、同じようにスタートを切れるからです。例えば、本校では、教室の席順について男子列・女子列というスタイルをやめて、男女が交互になる席順に統一しようと考えています。私語がしにくくなるからです。

生徒の現状を把握するために、「こういうデータを取ってみよう」と主導するのも校長の役目だと思います。例えば、本校が10年程前に行った調査で、1年生の通塾率は約60%という結果が出ました。先生方はずっとその感覚を持っていましたが、09年度に改めて調査をしたところ、通塾率は40%という結果が出ました。これを受けて、学校外での学習を支援すべきという意見が出て、定期テスト前の土曜日に希望制の補習教室を始めました。古い感覚をそのままにせず、今、目の前にいる生徒の実態を捉え、それに合わせた取り組みをしなければなりません。

測上 中学校の課題は学習面だけでなく、生活指導や保護者への対応など山積みです。先生方は日々の指導に追われて、取り組みたいことがあってもなかなか出来ない現状にある

と思います。そうした中で、先生方の意欲を高め、現状を変えるためには、取り組みの必要性を教職員に周知、理解、納得させ、一人ひとりのモチベーションを上げること、地域の子どもを責任を持って9年間かけて育てるという意識を持つてもらうことが大事だと考えます。

茅原 例えば、数学の教師の中には、分数のかけ算やわり算を小学校の何年生で習うのかわからない人もいます。少なくとも自分が担当する教科の9年間の内容を知らずして、中学校の教師は務まりません。

11年度には小学校で新学習指導要領が全面实施となります。本校では、小学校の新しい教科書をすべてそろえたいと考えています。小学校の学習内容を把握せずに、中学校の新学習指導要領へのスムーズな移行は出来ません。こうした土台があれば、新入生の学力を把握するためのテストを学校独自で作成することも可能になるでしょう。小学校で育てていただいた子どもたちを受け入れる中学校の教師は、小学校の領域を含めた義務教育9年間を見通して、指導力を高めていくことが重要だと思います。

生徒に身に付けてほしい学習習慣

自ら「学ぶ」姿勢

◎「習う」ことと「学ぶ」ことの違いを意識。定期テストに向けて、自ら計画を立て、学習し、テストで確認。結果が返ってきたら復習する。この学習サイクルが受験勉強につながる

学習習慣の定着に向け導入期に行いたいこと

新入生の学力の早期把握

◎生徒が小学校で受けてきた教育はさまざまで、学力も差がある。得意は何か、どこでつまづいているのかを、単元レベルで把握する

生徒の意欲を生かす指導

◎新生活を迎え、生徒は不安もあるが、期待も持っている。宿泊合宿やガイダンスなどを行い、「変わりたい」という意欲を逃さずに学習方法を伝える

導入期指導で校長に求められる役割

学校としての指導の統一

◎担任の指導経験の差を埋めて、生徒が一斉に良いスタートを切れるよう、指導の統一を図る

入学プレテストと春休み課題で 学習習慣を定着させる

東京都 狛江市立狛江第三中学校

生徒の問題行動が多発していた狛江市立狛江第三中学校。小学校と連携し、中学生としての自覚を促すと共に、小学校卒業後の春休みの時期から生活習慣や学習習慣の指導を取り入れている。

課題

- 中学生にふさわしい生活習慣が身に付いていないため、生徒指導上困難な状況が続いていた
- 学力差が開きやすい国語、算数の学力把握が、入学後すぐに出来ていなかった

実践

- 3月第1週に小学校で「入学プレテスト」を実施。中学校への緊張感を高めると共に、新入生の学力把握に役立てる
- 「入学プレテスト」当日に「春休みの生活と学習～中学生へのスタート～」と題したしおりを配布。春休み中の目標や生活記録を書かせるのに加え、国語、数学の学習課題に取り組みさせることで、生活習慣や学習習慣が崩れるのを防ぐ
- 各教科の最初の授業で「オリエンテーション」を行い、中学校での学習の仕方を教える
- 教科ごとに学習の進め方や1年間の流れなどをまとめた「シラバス」を作成。生徒が見通しを持って学習できるようにする
- 年2回、夏休みと冬休みの前に、学習状況を振り返る「学習の記録」を行う

成果

- 学習習慣が早期に身に付き、学校も落ち着きを取り戻した
- 中学校生活のスタートに向けて、保護者の意識も高まった
- 継続的な学習の成果で、市の学力状況調査の成績が向上した

School Data

◎1973（昭和48）年開校。2008年度、生活指導などの成果より、東京都教育委員会から「学校経営の改善」を主な功績として表彰を受ける。10年度に狛江市教育研究奨励校の指定を受ける。



校長◎齊藤茂好先生

生徒数◎248人 学級数◎7学級

所在地◎〒201-0013 東京都狛江市元和泉 1-23-1

TEL◎ 03-3489-5416

URL◎ <http://www.komae.ed.jp/jh/03/>

公開研究会◎ 2011年2月3日（木）

中学校**導入期**に**学習習慣**を定着させる

**意識改革と学力把握のため
「入学前」に着目**

狛江第三中学校は、東京都心のベッドタウンとして発展してきた狛江市の西部に位置する小規模校だ。同校は、生徒指導が難しい状況が長らく続いてきたが、5年ほど前から生活習慣や学習習慣の改善を図る指導に力を入れてきたことで、近年は落ち着きを取り戻した。

生徒の変化に伴い、保護者や地域からの信頼も高まり、「共に生徒を見守る」という良好な関係が強まった。齊藤茂好校長は、次のように取り組みを振り返る。

「苦しい時期もありましたが、諦めずに取り組みを続けることで、生徒の姿は徐々に変わってきました。『教師の働き掛けによって、生徒は必ず変わる』という実感は、先生方の自信の源となっています」

そんな同校では、**学習習慣を付けさせる指導**において、「**入学前**」の時期に着目した指導の充実に取り組んできた。同校の校区には二つの小学校があるが、生徒の9割は1校の小学校から入学してくる。同級生の顔ぶれがほとんど変わらないためか、生徒は中学生になることへの自覚を持ちにくく、「中学生になったからしっかりやろう」という意識の切り替えが出来ていないようだった。

更に、入学後、国語や数学は学力差が大き

く開きやすいため、出来るだけ早い時期に生徒の学力を把握して対策を講じる必要があった。小学校から指導要録の抄本は送られてきていたが、3段階の絶対評価であるため、生徒一人ひとりの学力は、授業がある程度、進むまで分からなかった。

**入学プレテストが
中学校の始まり**

これらの問題意識から、2006年度に始めたのが「**入学プレテスト**」だ（P.12図1）。3月第1週の放課後、同校に入学予定の小学6年生を対象に、小学校で国語と算数のテストを実施する。

テストは、同校の教師が中学1年生での学習内容を意識して作成。小学校での学習内容からまんべんなく、基礎的な問題を中心に出題する。試験時間は2教科合わせて40分間で、どちらの教科を先に解いても良い。出来るだけ小学校側の負担とならないよう、当日は中学校の教師が小学校に向いてテストの説明をし、試験監督も行う。

教務主任の國井千鶴子先生は、テストを受ける小学生の姿から手応えを感じていると話す。

「中学校の教師が試験監督をするため、子どもはかなり緊張します。かえってそれが良い刺激となり、『中学校の始まり』と意識して取り組むようです。解答用紙を見ると、学



狛江市立狛江第三中学校校長
齊藤茂好 Saito Shigeoshi
「どのような状況でも、諦めずに地道な努力を続けられる主体性のある生徒を育てる」



狛江市立狛江第三中学校
國井千鶴子 Kunii Chizuko
教務主任。英語科担当。「エネルギーにあふれ、一人立ち出来る力を持つ生徒を育てる」



狛江市立狛江第三中学校
中村嘉男 Nakamura Yoshio
生活指導主任。3学年担当。社会科担当。「打たれ強く、困難にめげない強さを生徒に持たせたい」

力が定着している子どもも、そうでない子どもも、皆、一生懸命に解こうとしている気持ちが伝わってきます」

答案は担当教科の教師が採点。中学入学後、最初の授業で返却し、解説もする。この授業が小学校の学習内容の復習にもなり、以前に比べて国語や算数の授業の導入はスムーズになった。

入学前に、生徒の学力に関する詳細な情報が得られる利点も大きい。入学後すぐに始める数学の少人数授業では、テストの結果から生徒一人ひとりの学力を把握しておき、クラス編成に活用している。学年全体の弱点も浮かび上がるため、「今年度はこの単元を手厚く指導しよう」などと指導計画にも反映している。

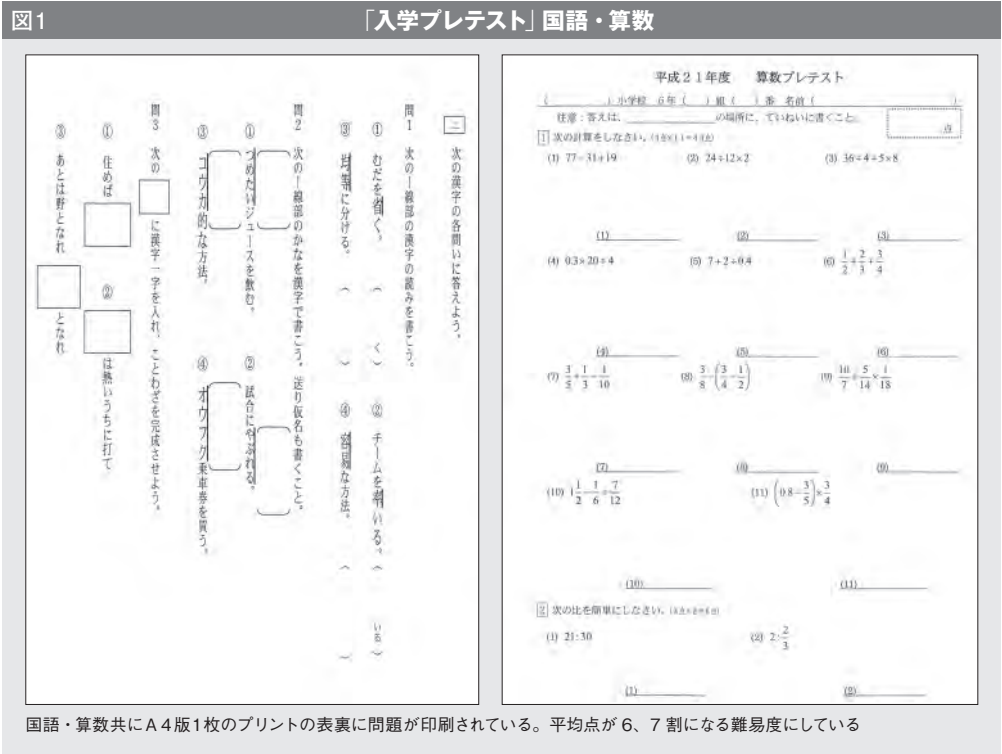


図1 国語・算数共にA4版1枚のプリントの表裏に問題が印刷されている。平均点が6、7割になる難易度になっている

**「空白」期間の春休みを埋める
学習課題を小学生に配布**

小学校卒業式後の春休みも、重要な指導の場と位置付ける。新入生が規則正しい生活を送り、学習習慣を途切れさせないようにす

日どのように過ごしたのかを記入する。自ずと生活習慣が意識される仕組みだ(図2)。学習習慣が定着している生徒、遊びを優先する生徒、夜更かしが目立つ生徒など、一人ひとりの生活の様子や家庭の状況が手に取るように分かる。入学式当日に提出させ、それら

るため、「入学プレテスト」当日、春休み中の目標や毎日の生活記録、国語と算数の2週間分の練習問題などが含まれた「春休みの生活と学習」中学生へのスタート」というしおりを配布し、春休みが新しい学校生活に向けての大切な準備期間であることを説明する。

「小学校卒業式から中学校の入学式までの約3週間は、小学校と中学校のどちらの指導もなされない『空白』の期間でした。この時期に中学校に対する期待感や緊張感を高め、小学校とは異なる学習習慣や生活習慣を少しでも身に付けられれば、中学校への接続がスムーズになると考えました(斉藤校長)

生活記録の部分には、毎年2月に行う保護者説明会では、『入学プレテスト』やしおりのねらいを説明し、入学時に良いスタートが切れるよう春休みを有意義に過ごすための支援をお願いします」

の情報を基に「まずは生活指導を徹底したほうが良さそうだ」など、生徒個々の指導を検討する。

練習問題は、学習習慣の定着に加え、中学校の学習への準備として小学校の学習内容を復習させるねらいがある。

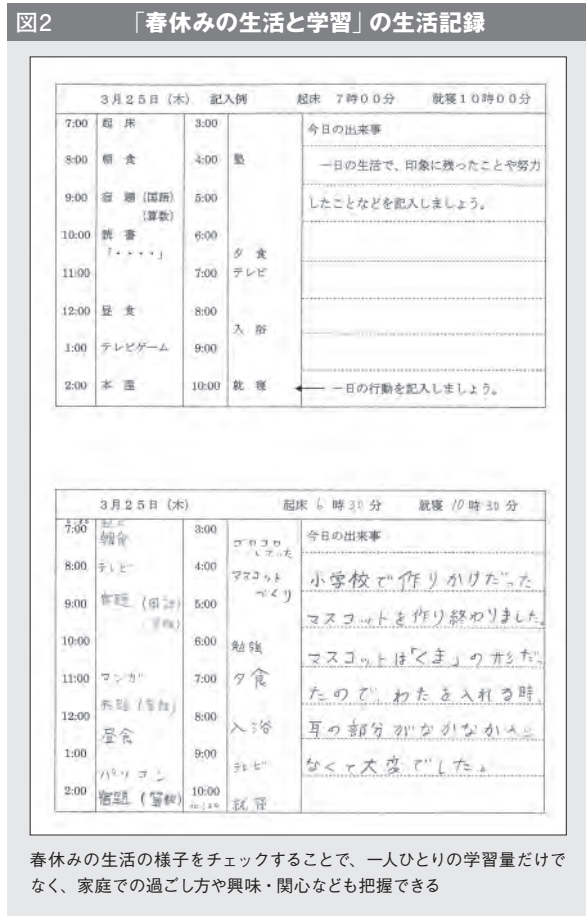
「国語と算数共に、1日10分ほどで解ける程度の内容です。家庭学習の量としては多くはありませんが、春休み中も気を抜かず、毎日、学習を続けてもらうことを重視しています。例年、すべての生徒がしっかりと問題を解いてきます(國井先生)

**保護者の協力も得ながら
生徒の生活習慣を改善**

しおりには、保護者が春休み中の子どもの生活についてコメントを書く欄も設けた。生活指導主任の中村嘉男先生は、そのねらいを次のように説明する。

「子どもが、自分だけの力で生活習慣や学習習慣を改めるのは困難です。保護者にも、中学校への進学を機に、小学校時代からの意識を変えていただかなくてはなりません。毎年2月に行う保護者説明会では、『入学プレテスト』やしおりのねらいを説明し、入学時に良いスタートが切れるよう春休みを有意義に過ごすための支援をお願いします」

中学校**導入期**に**学習習慣**を定着させる



**小学校との密な連携が
取り組みの土台**

これらの取り組みには、小学校の協力が不

が寄せられている。「1日の行動記録を見て、テレビやゲームの時間が長いことに驚かされました。進学の機に、親子で話し合い改めたい」「春休みも学習する機会が出来たことで、メリハリのある生活が送れたようです」「入学プレテスト」や春休みのしおりで、子どもも中学生になるという自覚が高まっていたようです」
導入期の指導が、子どもと保護者が共に学習や生活について考え直すきっかけになっていることが分かる。

可欠となる。同校は日頃から小学校と連携し、その土台を築いている。「一般的に、中学校の教師が小学校に立ち入って指導することには、物理的にも心理的にも大きな壁があります。その点、本校が取り組みをスムーズに進められたのは、以前から小学校との連携を重視して信頼関係を築いてきたことが大きな要因であると思います」(斉藤校長)
同校では、年2回「小中連携の日」として、小・中学校の教師が相互に授業を参観し、意見交換をする場を設けている。このうち1回は狛江市の公立学校共通の取り組みだが、もう1回は同校が独自に企画しているものだ。また、狛江市が実施する学習状況調査のうち、同校1年生の結果を小学校に伝えて共有するほか、中学校の教師が小学校を訪問してワークショップを指導したり、春休み中に希望する部活動への「プレ入部」を行うなど、継続

的な交流を大切にしている。「小学校の先生方との間には、その年の6年生の傾向や気になる子どもの情報などを気軽に伝えてもらえる関係が出来ていますし、私たち自身が小学生に接する機会もあります。『入学プレテスト』の結果も合わせて、新入生の状況を十分に把握して4月を迎えています」(中村先生)

**シラバスや「学習の記録」で
入学時の意欲を継続させる**

生徒が入学当初に抱く緊張感を、主体的に学ぶ姿勢につなげる工夫もする。かつては入学式から授業が本格的に始まるまで1週間ほどかかり、せっかく意欲を持って入学しても、その間に生徒の気持ちが緩みがちだった。

そこで、年間計画を見直し、時間割作成の早期化に取り組み、入学3日目から授業を行うようにした。初回の授業では、どの教科もオリエンテーションを行う。授業の進め方や学習上の注意点、家庭学習の方法、テスト前の学習法、評価基準など、共通項目を教科ごとに整理した「シラバス」(P.14 図3)を配布し、それを見ながら中学校での学習について説明する。1年間の学習内容の流れも提示し、見通しを持って学ぶように促している。「1年生のオリエンテーションでは、自ら進んで学んだり工夫したりする大切さなど、

中学生に求められる学習の方法や意識について重点的に説明し、小学校との違いを明確に意識させます。生徒を学習に向かわせる上で重要な役割を果たしています(國井先生)

更に、1年を通して学習意欲を保つ工夫が、夏休みと冬休みの前に配布する「学習の記

図3

「シラバス」数学の例

数学の学習を進めるにあたって(1年生)

◆授業の進め方

- 授業には、教科書・ノート・ワーク・プリントを(単元によってはコンパス・定規)を必ず用意してください。
- その日の学習内容を授業の最初に確認し、進めていきます。
- 説明を聞くときは、大事な点を聞き逃さないように集中しましょう。また、先生の発言の中にも考え方のヒントが与えられています。自分の考え方の参考にしましょう。
- 問題を解く時間をできるだけ確保します。わからないことがあったら、質問をしてください。
- 考えうる過程(なぜそうなるか)を大筋にすることを心がけてください。
- 解ければそれでよいという態度は望ましくありません。なぜそのような解き方が正しいのか、他の方法が解かれない理由などを常に考えながら積極的に講義しましょう。
- 質問は必須に応じて出します。(発言は必ず行いましょう)
- 小テストを必須に応じて実施します。テストの日・回数・時間についてはお知らせします。

◆学習する上で注意してほしいこと

- 授業に必要なものを忘れずに持参しましょう。
- 宿題・提出物は規定の期日前に、必ず期限を守りましょう。
- ノートには教科書と授業のみを書くのではなく、途中の式を書き加えましょう。(間違えたとき、どこで間違えたかわかり、次のときに同じ間違)をしないために大切なことです。また、授業以外の口頭で説明した内容は、きちんとノートに書き留めるようにしましょう。

◆家庭学習の進め方

- その日に習った学習の復習として、ワークをやりましょう。
- 授業で解いた問題をもう一度解き、確認しましょう。

◆テスト前の学習

- ノート(復習したこと)を中心に復習しましょう。
- 「問題」(たし算)・「例」の順に確認しましょう。
- 教科書の例題・ワークは最終まで目を通しましょう。ワークで間違えた問題やわからなかった問題は、解答までよく読んで理解しましょう。
- わからないことがあったら、質問してください。

◆1年間の学習内容

月	前 期	後 期
4	第1章 正負の数 正負の数 加減と乗法 乗法と除法	第4章 比例と反比例 反比例 比例と反比例の応用
5		11
6	第3章 文字と式 文字を使った式 文字式の計算	12
7		1
8	第3章 方程式 方程式 1次方程式の利用	2
9		3
10	第4章 比例と反比例 比例	4

◆評価

- 数学に関する関心・意欲・態度・・・・・・・・・・25%
授業中の態度や質問に対する積極的な態度等を評価します。
・ノートは、復習を写してあればBの評価です。口頭で説明した内容を記入するなど、工夫してあればAの評価になります。
・ワークは、指定された範囲を自分で解く。〇行や間違い直し等が丁寧にあればAの評価になります。
- 数学的な見方や考え方・・・・・・・・・・25%
数学的な表現・処理・・・・・・・・・・25%
- 数量・図形などについての知識・理解・・・・・・・・・・25%
*①②③に關して、中間考査、期末考査、小テスト、提出物等で評価します。

数学科の学習の進め方を伝える1年生のシラバス。授業の進め方だけでなく、家庭学習やテスト前の学習を一人で進めるポイントも説明している

録」(図4)だ。教科ごとに用意する用紙には、生徒が自己評価を記入するスペースと、教科担当の教師が学習や提出物などの状況を細かく評価するスペースを設けている。生徒が自分の学習を振り返るきっかけにするために、三者面談の資料として活用する。必要に

図4

夏休みと冬休みの前に配布する「学習の記録」1年生数学の例

平成22年度 学習の記録(1年 数学)

1年 組 番 氏 名

1. 自己評価

【取り組みの目標】	【評価】
忘れ物をしない(教科書・ノート・ワーク・ファイル・宿題)	
授業開始の準備ができていない(教室移動、チャイム着席)	
おしゃべりや居眠りをせず、集中して授業に取り組む	
授業中、積極的に発言をする	
ノート・ワーク・サポーターなど期限を守って提出する	
家庭学習に取り組む	

【内 容】	【理解度】
整数・自然数・数の大小(不等号)・絶対値	
正負の数 加法・減法 乗法・除法	
文字と式 文字を使った式の表し方(積・商)	

A:よくできている(80%以上)
B:だいたいできている(50%~80%)
C:努力が必要である(50%未満)

2. 学習および提出物等の状況

観点	【内 容】	【評 価】
見	前期中間考査(25点満点)	A B C
表	前期中間考査(48点満点)	A B C
知	前期中間考査(27点満点)	A B C
見	小テスト③(4点満点)	A B C
表	小テスト①②③(26点満点)	A B C
知	小テスト①②(9点満点)	A B C
関	ワーク提出(P. 2~9, GW中の宿題)	A B C 未
関	ワーク提出(P. 10~27, 前期中間考査後)	A B C 未
関	ノート提出(前期中間考査まで)	A B C 未

***観点**

関: 数学への関心・意欲・態度
見: 数学的な見方・考え方
表: 数学的な表現・処理
知: 数量、図形などについての知識・理解

***評価**

A: 80%以上できている
B: 50%~80%できている
C: 50%未満のため、努力が必要である
未: 未提出

◆提出物

観点	【内 容】	【提出状況】
関	サポーター(1・2)	
関	サポーター(7・9)	

○: 提出
△: 期限内で提出(家庭学習未提出)
未: 未提出

3. 担当からのコメント

基本的な内容の理解がほぼできています。この調子で頑張ってください。
理解が不足しているところがあります。家庭学習を大切にしましょう。
授業に集中して取り組みましょう。(私語、居眠り等)

1年生数学の「学習の記録」。学習姿勢・学習態度に関する自己評価を記す欄のほか、「担任からのコメント」を記す欄もある。自分の学習状況を細かく把握できると共に、教科ごとのガイダンスや三者面談の資料としても活用できる

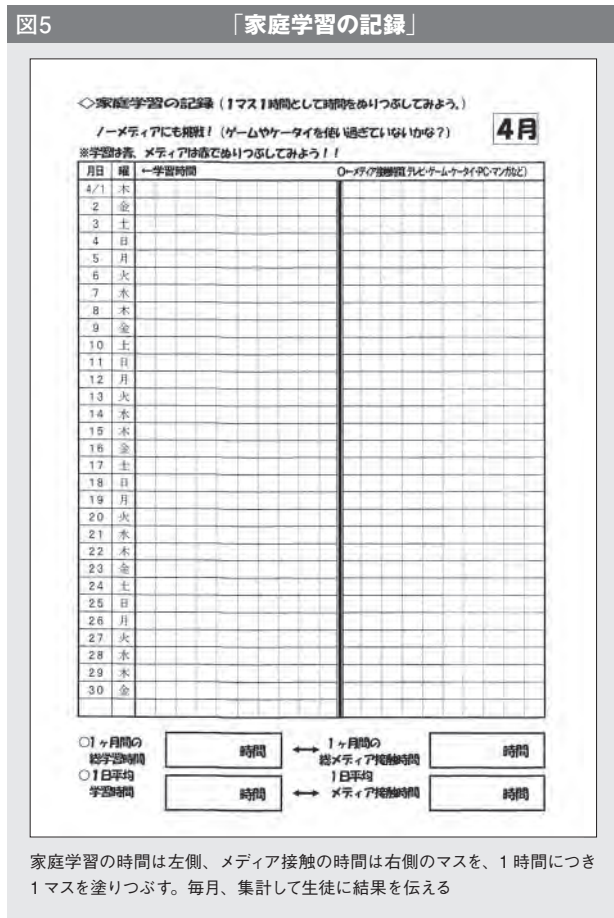
に応じて、各教科担当の教師が個別に「ガイダンス」を実施し、学習の仕方をアドバイスしたり、長期休業中の補習への参加を促したりしている。

「学習の記録」は通知表に比べて、評価が具体的に記されているため、「自分はこの部

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第3回

中学校**導入期**に**学習習慣**を定着させる



分が弱いのか』など自覚しやすくなっています。学習の記録の作成を始めてから、通知表の評価についての問い合わせがほとんどなくなりました」（斉藤校長）

「心」を育てる教育で、生徒の「出来る」という気持ちを引き出す

生活習慣や学習習慣の指導と並行し、同校が力を入れるのが「心」を育てる教育だ。生徒が褒められたり、認められたりする場面を数多くつくり出して自己有用感を高め、何事にも前向きに取り組む姿勢を育てる。

「かつて生徒の間に問題行動が目立った時期は、生活態度や学習規律について教師や保

護者から叱られ、更にやる気をなくしていたのだと思います。そのような悪循環を断ち切り、逆に褒められる場面を増やすことにより、『自分にも出来る』という気持ちを育てたいと考えています」（中村先生）

代表的な取り組みが「銀杏募金」だ。毎年、校内のイチヨウの木から得られるギンナンを集め、募金をしてくれた保護者や地域住民にお礼として銀杏を贈る寄付活動だ。全校生徒が積極的に取り組み、08年度には「生徒会が中心となった特色ある募金活動」として東京都教育委員会から表彰された。

一連の取り組みの成果として、校内は落ち着きを取り戻し、学力も着実に向上してい

る。狛江市が毎年4月に実施する国語と算数の学習状況調査では、近年、市の平均を上回るようになった。生徒が学習に向かう姿勢が整ったという判断から、10年度には家庭学習の定着に向けた指導

を本格的に始めた。10年度版のシラバスの巻末には、毎日、家庭学習とメディア接触時間（テレビ・ゲーム・携帯電話・マンガなど）を記録するシート「家庭学習の記録」が加えられた（図5）。1時間ごとにマスを塗りつぶすことで、家庭学習とメディア接触のそれぞれに費やした時間を対比させるにつくり出した。

「放課後、生徒は部活動や塾などがあり、かなりの多忙感があります。しかし、自ら学びを深めていく力を育てるには、家庭学習の定着は欠かせません。そこで記録シートを通して、テレビやゲーム、携帯電話といったメディアに触れる時間の長さを自覚させ、家庭学習の時間を少しでも確保したいと考えています」（中村先生）

これまで、宿題は教科ごとに統一されていなかったが、今後は教師が情報を共有して毎日の宿題の量を調整していく考えだ。

同校が最終的に目指すのは、主体性を持って学習し、たくましく生きることの出来る生徒の育成だ。

「今の社会はあらゆる面で便利になり、あまりものを考えなくても生活できてしまう状況にあります。だからこそ、生徒に対して、適切な課題やプレッシャーを伴う環境を与えることによって、自主的に考え、行動する力を育てていきたいと考えています」（斉藤校長）

入学前後の2回の合宿で 新入生を「中学生にする」

石川県羽咋市立羽咋中学校

小学6年生の11月に中学1年生と「宿泊体験学習」を行い、更に、中学入学後の4月下旬には2泊3日の「宿泊研修」を行う羽咋市立羽咋中学校。この二つの合宿を柱にし、中学生らしい学習習慣の形成を1年生の導入期に徹底して行っている。

課題

- 小学6年生が中学校生活に対して「見通しのない不安」を抱えていた
- 学級や人間関係の基盤がなかなか出来ず、学ぼうとする姿勢が早期に確立できなかった
- 小学校の単元テストと中学校の定期テストのギャップに、意欲が低下してしまう生徒がいた

実践

- 中学1年生と校区の小学6年生の「宿泊体験学習」を毎年11月に開催。子ども同士のコミュニケーションを深める
- 入学式の翌日に「進級テスト」を実施。その準備のための「進級テスト用学習プリント」を春休みの宿題に課し、中学校の学びへの接続を図る
- 4月下旬に2泊3日の「宿泊研修」を実施。学習方法の指導や学級集団づくりを徹底
- 毎日、宿題以外の家庭学習をする「自習帳」と、生活を記録する「生活記録帳」を使い、学習習慣の定着を継続的にフォロー

成果

- 新入生の中学生活に対する不安が大幅に減り、不登校の生徒が減少した
- 早期に中学生らしい学習習慣が身に付き、クラスの集団意識も高まった
- 「進級テスト」によって、小学校時代に比べて平均点が格段に低くなる中間テストのショックが和らいだ

School Data

◎1947（昭和22）年開校。教育目標は「気力・体力・学力・心力を基底とし、21世紀を担う心身ともに健全でたくましい生徒の育成」。校区にある四つの小学校と連携し、小中のスムーズな接続に取り組む。



校長◎藤田 茂先生

生徒数◎485人 学級数◎16学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒925-0052 石川県羽咋市中央町キ59

TEL◎0767-22-1135

URL◎<http://www.city.hakui.ishikawa.jp/hakui-j/>

中学校**導入期**に**学習習慣**を定着させる

「中学生になるんだ」という
自覚を導入期で持たせる

羽咋市の中心市街地に位置する羽咋中学校は、5年前から校区の小学校との連携に取り組んでいる。中学校の行事紹介や中学校教師による小学校への出前授業から始め、段階的に連携を深めてきた。2009年度に同校に赴任した藤田茂校長は、それらの取り組みのねらいを次のように話す。

「中学校への入学前、子どもの心は期待と不安で満ちています。本校にも、見通しを持ってないことから不安を抱き、過度に緊張して入学してくる生徒がいました。適度な緊張感が必要ですが、ともすると学習スタイルのギャップの大きさに戸惑ってしまったり、最悪の場合、『学校に行きたくない』と思ってしまう可能性があります。これに対して、『中学校とはこういうものだ』という見通しを持たせ、『中学生になるんだ』という自覚を強めることで、中学生らしい学習スタイルにスムーズに適応できるようにしたいと考えました」

小6と中1の合同合宿で
中学校生活に見通しを持たせる

同校は、どのようにして新入生に中学校生活の見通しを持たせているのだろうか。その取り組みを見ていこう。

最も特色ある取り組みは、08年度から毎年11月頃に実施している「小中交流 宿泊体験学習（以下、宿泊体験学習）」である。校区の四つの小学校の6年生と同校の中学1年生が、校区内にある「国立能登青少年交流の家（以下、青少年交流の家）」に1泊2日で一緒に活動するというもの。入学前から子ども同士のコミュニケーションを深め、中1ギャップを軽減するのがねらいだ。

09年度は、小学6年生151人と中学1年生161人の全員が参加。小・中学生混合として1班22〜24人の13班に分けた。

活動内容は、子ども同士で協力し合わなければ達成できないようなレクリエーションが中心だ。与えられた情報を基に宝島の地図を完成させる「なぞの宝島」、一人ずつ見つけた絵を画用紙に再現していく「人間コピー機」などを行った。

こうした活動を通して、小・中学生の縦のつながりと、四つの小学校から集まる小学生同士の横のつながりが生まれる。中学校で置かれる状況を、入学前に体験できるのだ。特に、規模が小さい小学校の子どもにとっては、そのメリットは大きいと言う。

「本校の校区には四つの小学校があります。うち3校は1学年20人程度の小規模校です。つまり、3校の小学生は、班の中でも同じ出身者が1、2人ずつの少数派になります。3校はいずれも郊外に位置するため、純



羽咋市立羽咋中学校校長
藤田 茂
Fujita Shigeru
「笑顔と挨拶があふれる学校をつくりたい」



羽咋市立羽咋中学校
湊口 博
Minatoguchi Hiroshi
教務主任。理科担当。「出来るだけ長く子どもたちと一緒にいる時間を過ごしたい」



羽咋市立羽咋中学校
白山 芳治
Shirayama Yoshiharu
2学年主任。数学科担当。「さまざまな行事や活動を通して、リーダーになる子どもを数多く育てたい」

朴な気質が強く、自分の意見を主張するのがやや苦手の傾向があります。3校の先生方からは「中学校では少数派になるという現実を早い段階で体験できる効果は大きく、中学校に入ってから心細さを感じるのを未然に防げる」との声が寄せられています（藤田校長）

09年度、1学年主任として「宿泊体験学習」を指導した白山芳治先生は、中学1年生が先輩としての自覚を高める効果もあると指摘する。

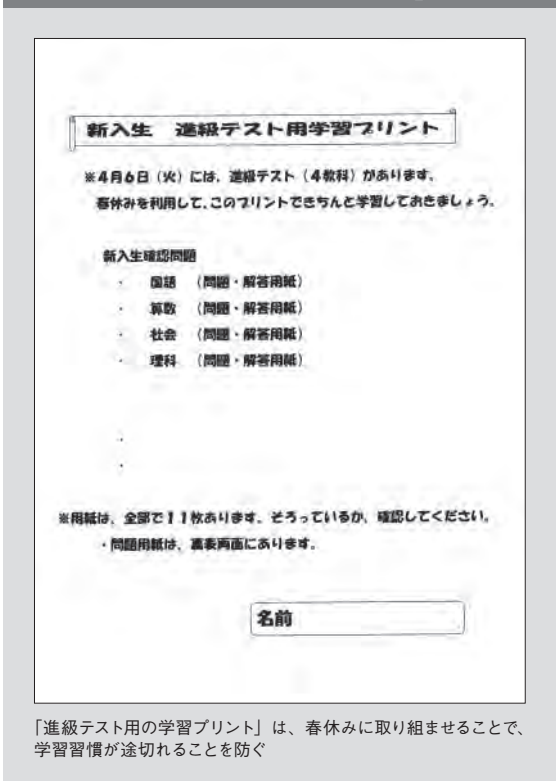
「3校の小学生は他の子どもに溶け込みにくいかと思いましたが、同じ小学校出身の中学1年生が気を遣って声を掛けていました。中学1年生は、前年度、小学6年生の時に参加した経験から、後輩の面倒をみようとするのです。1年目は先輩に教えられ、2年目は

図1 小6から中1導入期の取り組みの流れ

6月	・羽咋郡市唐戸山相撲大会見学—羽咋郡内と同市内の中学校6校による相撲大会を校区の小学生が見学
11月	・小中交流 宿泊体験学習—校区の小学6年生と中学1年生が合同で1泊2日の合宿
12月	・入学説明会—小学6年生と保護者、小学校の学級担任を対象に開催
2月	・先輩と語る会—中2の生徒が母校に出向き、小6の児童の質問に応える
3月	・新入生仮入学—中学生生活をスムーズにスタートできるように、学習の取り組みや部活動を紹介 ・進級テスト用学習プリント—入学後の進級テストの準備として、春休みの課題プリントを配布
4月	・進級テスト—入学式翌日に国語・算数・理科・社会の4教科のテストを実施 ・宿泊研修—2泊3日にわたって、人間関係づくりや学級づくりを進める
5月	・小学校旧担任団による授業参観—小学校の旧担任を招いての授業参観を開いた後、旧担任と生徒の懇談会、旧担任と中1学年団の連絡会もそれぞれ開催

*学校資料を基に編集部で作成

図2 「進級テスト用学習プリント」



「進級テスト用の学習プリント」は、春休みに取り組ませることで、学習習慣が途切れることを防ぐ

逆に先輩として後輩に教える立場になるわけです。生徒は、自分がしてもらってうれしかったこと、相手に喜んでもらえることを意識して行動していました。異なる立場で2年間を通して参加することに意義があると思います」

他にも、中学2年生が母校の小学校を訪れて小学6年生と交流する「先輩と語る会」や授業交流など、小・中学校が交流する機会を設けている(図1)。同校に赴任して8年目の湊口博先生は、新入生の変化を次のように語る。

「以前の新入生は表情がこわばっていました。少しずつ緊張感がなくなっていると思います。中学校への不安は小さくなっています」

ようですが、緊張感が薄れすぎている点の改善が今後の課題です」
徐々にはあるが、不登校の生徒も減ってきているという。

「進級テスト」で中間テストをブレ体験

人間関係の面だけでなく、中学校での学習もいち早く体験させる。入学式の翌日に小学校の総復習的な内容を出題する「進級テスト」を実施すると共に、その準備のための春休みの課題「進級テスト用学習プリント」(図2)に取り組ませるのだ。

同校では、3月中旬に新入生向けの部活動紹介を行う。この時に、国語、算数、理科、

社会の4教科の「進級テスト」を入学後すぐ実施すると伝え、「進級テスト用学習プリント」を配布する。春休み中に各自で取り組み、プリントは入学式当日に提出する。

「進級テスト用学習プリント」は問題用紙と解答用紙が別々であり、「進級テスト」に似たテスト形式にしてある。ただし、テストはプリントから出題されるわけではなく、あくまでも中学校でのテストの形式に慣れさせてもらうためのものと位置付けている。

「進級テスト」は入学式の翌日に実施。制限時間は各教科50分間で、結果は2週間後に生徒に返却する。

「テスト結果によって、生徒個々の学力を早期に把握できるため、授業の難易度を設定

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第3回

中学校導入期に学習習慣を定着させる

図3 「宿泊研修」2泊3日の内容	
1日目	8:00 学校に集合
	8:15 出発式
	9:30 青少年交流の家到着
	10:00 入所式
	研修1◎オリエンテーション
	・代表挨拶、施設利用についての説明、諸注意
	10:30 荷物移動
	11:00 研修2◎学年集会
	・体育館に集合し「中学生とはどういうものか」、学年主任の話を聞く。
	11:50 昼食
	13:00 研修3◎学級目標の作成と個人目標づくり
	・生徒一人ひとりが、中学1年生としての目標を立て、その後、クラス全体での1年間の目標を立てる
	17:00 イブニングタイム
	18:00 夕食
18:40 ベッドメイキング	
19:00 研修4◎作文「中学生になって」	
・中学3年間で何がしたいのか、夢や目標を1000字程度の作文に書く	
20:30 寝具、お茶の配布	
21:00 入浴	
21:50 室長会議	
22:30 就寝	
2日目	6:30 起床
	7:00 フレッシュタイム
	7:20 朝食
	8:30 清掃(決められた場所を協力して、丁寧に掃除する)
	9:00 研修5◎レクリエーション説明、校歌練習、対抗戦
	・クラスごとにゲーム等を行う。親睦を図るのが目的。校歌の練習を行い、クラスごとに全クラスの前で歌う
	12:00 昼食
	13:30 研修6◎オリエンテーリング
	・各クラス5~6グループに分かれ、敷地内でオリエンテーリングを行う。教師がチェックポイントに立つ
	17:00 イブニングタイム
	17:30 入浴
	18:30 夕食
	19:30 研修7◎自習帳学習
	・家庭での学習の仕方を指導する。自習帳のよい例を見せながら、家庭学習の意識付けを行う
21:00 就寝準備	
21:30 室長会議	
22:30 就寝	
3日目	6:30 起床
	7:00 フレッシュタイム
	7:20 清掃(決められた場所を協力して、丁寧に掃除する)
	8:00 朝食
	8:40 宿舍点呼
	9:30 研修8◎防犯講座「中学生が陥りやすい犯罪」
	・警察署から講師を派遣してもらい講演
	10:30 お礼の言葉
	10:40 クラス発表会
	12:50 昼食
	13:40 退所式
	14:00 出発
	15:00 帰校式
15:30 終礼(教室でしおりのふり返りを記入)	

しやすくなりました。学力が高ければ、最初から難しい問題を出すという授業の組み立ても可能です」(湊口先生)

また、最初の中間テスト前のステップとして、中学校のテストとはどういうものかを、新入生が体験できるメリットもある。

「小学校のテストでは、多くの子どもが90点以上、時には満点を取ります。ところが、中学校のテストは平均点が60点程度です。小学生の時には高得点だったのに中学生になったらいきなり点数が低くなり、そこにギャップを感じて学習意欲をなくす生徒はかかります。そこで、『進級テスト』は平均点が70〜80点になるように作問し、中学校のテストをプレ体験させています」(湊口先生)

10年度は、4教科平均で正答率は77%だった。

「『進級テスト』は、保護者に対しても中学校のテストのスタイルを知ってもらおう機会になっています。『進級テスト』がクッション役になって、中間テスト、期末テストで『子どものテストの点数がこんなに下がった』と驚かずに済むようです」(藤田校長)

4月下旬の2度目の合宿で学びに向かう学級集団をつくる

4月下旬には、再び青少年交流の家で、新入生のみ「宿泊研修」を行う。2泊3日の日程で、「研修3 学級目標の作成と個人目標づくり」「研修4 作文『中学生になって』」

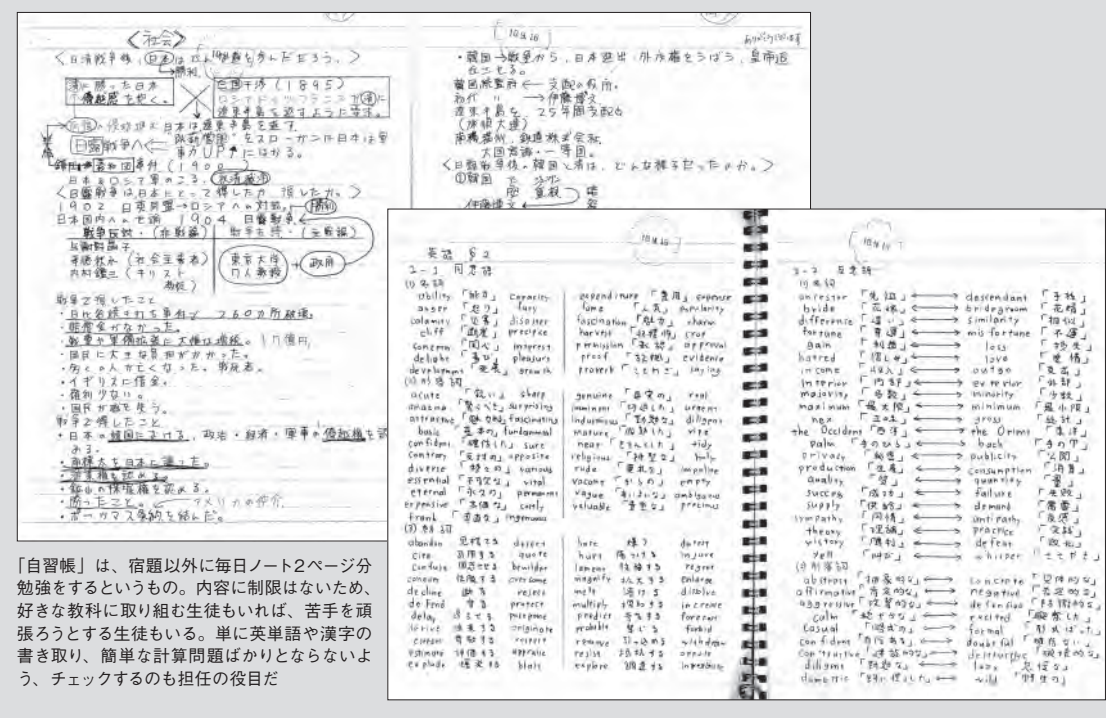
「研修6 オリエンテーリング」などに学級単位・班単位で取り組む(図3)。5分前行動などの規律を徹底的に指導し、クラス目標や個人目標を立てさせ、中学生としての自覚を持たせると共に、生徒同士、生徒と教師の間関係の育成、学級集団の形成を図る。

藤田校長は、授業時間を割いてでも「宿泊研修」を実施する意義を次のように話す。

「生徒が教師を信頼しなければ、授業は成り立ちません。教師と生徒の関係、生徒同士の関係が構築されて初めて、授業で学んだ内容が身に付くのです。入学当初は緊張していた生徒たちが、1週間、2週間たつにつれ、だんだん素を見せるようになり、4月下旬にもなると互いに慣れてきます。その時期にク

ラスメートと寝食を共にしながら互いをもつと知り、自分たちのクラスをどのような学級にしていきたいのか、学級目標を立てさせる

図4



「自習帳」は、宿題以外に毎日ノート2ページ分勉強をするというもの。内容に制限はないため、好きな教科に取り組み生徒もいれば、苦手な勉強をする生徒もいる。単に英単語や漢字の書き取り、簡単な計算問題ばかりとならないよう、チェックするのも担任の役目だ

宿泊研修を利用して、見本を見せて、どのような自習をしてほしいのかを、担任がアドバイ

のです。普段の学校生活では話し合いをするにも1コマ50分という区切りがありますが、合宿ではじっくり話し合うことが出来ます

「宿泊研修」では、学習習慣の定着に向けて、同校特有の指導も行う。2日目の「自習帳」を使った1時間半の家庭学習指導がそれに当たる。

「自習帳」(図4)は、宿題とは別に毎日家で自習し、担任に提出するという取り組み。入学時にはガイダンスを開き、中

生としての授業の受け方、家庭学習の仕方などと共に、そこで「自習帳」の取り組み方も説明しているが、合宿の場で改めてその意義を確認する。

「最初は、アルファベットの大きく書いたり、2〜3題の計算練習を大きく書いたりして、見本を見せて、どのような自習をしてほしいのかを、担任がアドバイ

スする時間に行っています。本校の調査では、1年生の家庭学習の平均は1時間15分でしたが、1年生で取り組んでほしい家庭学習の時間として、1時間半にしました(湊口先生)

担任が十分な時間をかけて生徒と触れ合えるため、早期に生徒の個性をつかめる場にもなっていると、藤田校長は説明する。

「研修はもちろん、食事も入浴も班ごとに行います。3日間も一緒にいれば、それまで目立たなかったのに積極的に仕切り出す生徒がいたり、誰もやりたがらずに困った時に『俺がやる!』と手を挙げて責任感の強さをうかがわせる生徒が出てきたりと、生徒のいろいろな面が見られる機会になっています」

「自習帳」と「生活記録帳」で学習のリズムをチェック

こうした導入期の指導でつくり上げたりリズムを崩さないように、その後も継続して指導する。その核になるのが、毎日、担任に提出させる「自習帳」と「生活記録帳」だ。

「チェックの仕方は教師に任されていて、両方にコメントを書いて返却する担任もいますし、私のようにどちらか一方に検印をして返す担任もいます。ただ、毎日必ず目を通すようにしています。生徒が書いてあることを見るだけでも、生徒の様子の変化をつかむ糸口になるからです。生活リズムの崩れの兆候に気付いて、未然に防げたこともありました」

中学校**導入期**に**学習習慣**を定着させる

(湊口先生)

ただでさえ学校が多忙になっている中で、「自習帳」と「生活記録帳」の両方を見るのは負担になる。藤田校長は「生活記録帳を止めてはどうか」と提案したことがあるという。しかし、教師からは「必要です」という答えが返ってきた。

「1クラス40人もいれば、話をしないで1日が終わってしまう生徒がいます。『生活記録帳』があることで、すべての生徒の様子が分かるから必要だと言われました。忙しいことを理由に生徒とのかかわりを少なくしてしまつと、必ずひずみが出てきます。確かに先生方は忙しくなっていますが、生徒と向き合うことから逃げたはいけないと改めて思いました。何を大事にすべきか取捨選択して整理することが、校長の役割として大切なのだと再認識しました」(藤田校長)

湊口先生は「生徒の役に立っている」という実感が最大の動機付けになると語る。

「自分のしていることが生徒の役に立っていると実感できるならば、どれほど忙しくても多忙感はありません。『自習帳』のチェックもそうですが、生徒を知ることが楽しいですし、充実感があります」

行事を精選する学校が多い中で、小中合同の「宿泊体験学習」や2泊3日の「宿泊研修」をあえて取り入れている羽咋中学校。学校裁量の時間に授業を入れたり、時には7時間目

に授業したりとやり繰りして時数を確保している。新学習指導要領への移行に伴い時数確保は更に厳しくなるが、これまで積み重ねてきた導入期指導は今後も続けていく方針だ。

羽咋市教育委員会の支援策

予算や関係機関との調整などを担当

羽咋中学校と校区の小学校との連携は、羽咋市教育委員会(以下、市教委)の「小中交流教育推進事業」の一環として進められている。08年度に始まった「宿泊体験学習」の主催も、市教委と青少年交流の家(独立行政法人国立青少年教育振興機構が運営)である。初年度は、同校とその校区の小学校が実施し、その成果を受けて09年度には市内のもう一つの中学校とその校区の小学校でも始めた。

学校教育課の正津信一課長は、次のように話す。

「我々は、小中の連携を強化して、中1ギャップの解消を図りたいと考えていました。一方、青少年交流の家はコミュニケーション能力を育成する教育プログラムに力を入れて事業の活性化を図ろうとしていました。両者の考えが一致し、事業連携に至ったのです」

「宿泊体験学習」には、大学生ボランティアも参加する。市教委と青少年交流の家は、

小・中学校間と施設、ボランティアの日程調整、ならびに事業推進のための予算支援などを行い、学校の活動を支援している。

小学6年生と中学校の授業規律を統一

市教委は、3年ほど前から小・中学校の授業規律を統一できないかと模索してきた。しかし、設定したルールが詳細すぎたため、徹底しきれなかった。

「10年度は、羽咋中学校の1年生と校区の小学校の6年生の授業で、『聞かれたことは単語ではなく文で答える』『発言者に目を向ける』という決まりごとに絞って統一しました」(正津課長)

「宿泊体験学習」などは、学校単独では資金的にも人的にも実施は難しい。そうした取り組みに対して、市教委が支援し、青少年交流の家等の関係機関との調整役を果たしているからこそ、小中連携のさまざまな取り組みが定着してきたといえる。



羽咋市教育委員会学校教育課学務担当課長
正津信一 Hikizu Shinichi
「先生一人ひとりの元気が出るようにサポートしていきたい」

◎石川県羽咋市
能登半島の付け根に位置する人口約2万4000人の市。日本で唯一、一般の自動車や自転車が波打ち際を走る「千里浜なぎさドライブウェイ」で知られる。市立小学校6校、市立中学校2校を有する。

春休みの課題と確認テストで 学習習慣の乱れを防ぐ

佐賀県 嬉野市立塩田中学校

小学校卒業から中学校入学までの約3週間は、子どもにとって「学習の空白期間」になりがちだ。嬉野市立塩田中学校は、「春休みの学習課題」と入学後の「確認テスト」を実施することで、この空白期間の解消に取り組んでいる。

課題

- 小学校卒業から中学校入学までの約3週間で、子どもが机に向かわない「学習の空白期間」になり、入学前に学習習慣が乱れていた
- 中1ギャップで、学習意欲を失ってしまう生徒がいた

実践

- 小・中学校の教師が協働で作成した「春休みの学習課題」を活用。小学校卒業前にプレゼントとして贈り、春休み中の学習習慣の崩れを防止する
- 「春休みの学習課題」は入学後すぐに提出、自己採点をさせる。その後、学校独自の「確認テスト」を実施。中学生らしい「定期テストに向けた学習」のサイクルを疑似体験させる
- 「確認テスト」の結果と「春休みの学習課題」の内容を合わせて見取することで、手立てが必要な生徒を早期に把握する

成果

- 新入生全員が「春休みの学習課題」を提出。学習の空白期間がなくなった
- 小学校時代には宿題をあまり提出していなかった子どもでも「春休みの学習課題」はきちんと提出するなど、「中学校に入ったら頑張ろう」という意欲の喚起に成功した
- 塩田中学校独自の試みであった「確認テスト」を嬉野市全域で実施するために、教育委員会で議論がスタートした

School Data

◎1968（昭和43）年に開校。田園が広がる校区は、穏やかで落ち着きのある土地柄。部活動が盛んで、2010年の地区大会では13競技中8競技で優勝した。



校長◎宮崎憲太郎先生

生徒数◎355人 学級数◎12学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒849-1411 佐賀県嬉野市塩田町大字馬場下甲1801

TEL◎0954-66-2030

URL◎<http://www3.saga-ed.jp/school/shiota-j/>

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第3回

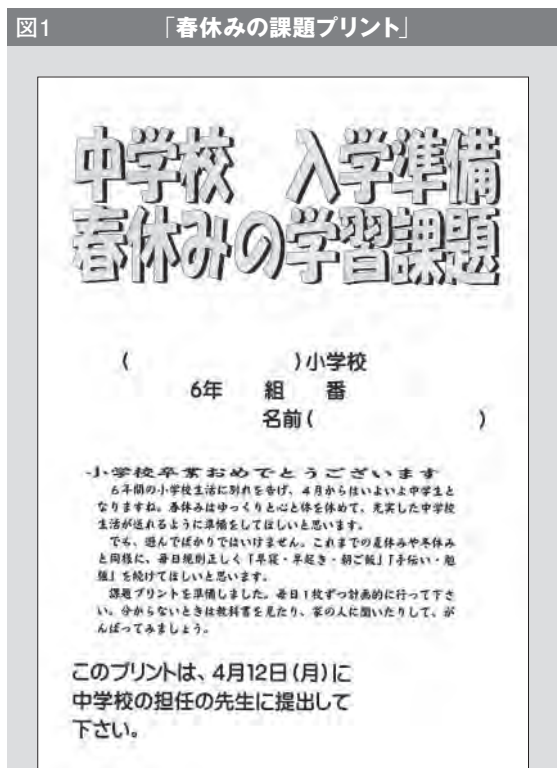
中学校導入期に学習習慣を定着させる

子どもを机に向かわせる 「春休みの学習課題」

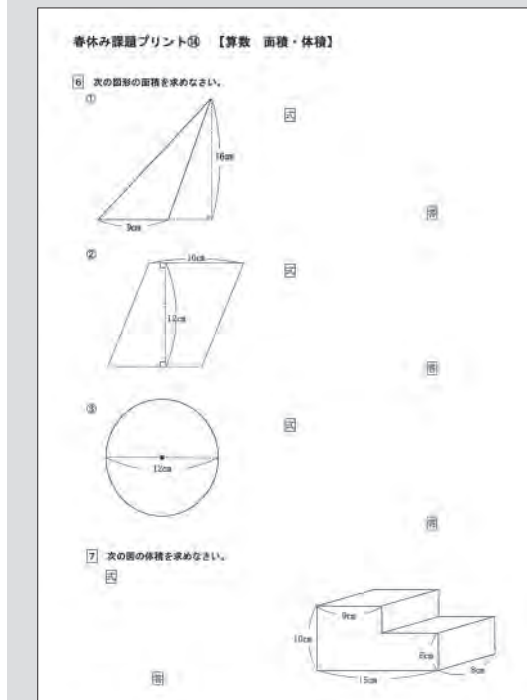
2010年春、塩田中学校に入学した新入生は、校区の四つの小学校から計122人。この全員が4月12日の提出日に、「中学校入学準備 春休みの学習課題」(図1)と題した冊子を担任に提出した。教務主任の宮崎彰先生は、生徒が中学校生活のスタートを順調に切れた手ごたえを感じたという。

「小学校時代は宿題を忘れて提出できず、注意されていた子どもでも、中学校での最初の課題を提出できたのは大きなポイントです。四校とも指示が徹底していたのでしょ」

「春休みの学習課題」は、小学校の学習内容を総復習するための冊子だ。嬉野市の教師



「春休みの学習課題」の表紙には、春休みの過ごし方の注意や、プリントに1日1ページ取り組むことが記されている



算数の「面積・体積」のプリント。課題の内訳は、国語7日分、算数5日分、理科3日分、社会3日分となっている

から成る「学力向上推進委員会」が作問を担当し、国語・算数・理科・社会の4教科の問題をA4判18ページ分にまとめた。分量は、小学校卒業から中学校入学までに1日1ページずつ取り組むことを想定して決められた。3月上旬に各小学校から児童に配布される。「小学校を卒業する3月中旬から中学校に入学する4月10日前後までの約3週間、手を打たなければ、子どもが机に向かわない『学習の空白期間』が生じてしまいます。学校からの解放感もあり、生活習慣が不規則になりがちです。この空白期間を埋め、中学校の学習にスムーズに接続するのが、この冊子を活用する最大の目的です」(宮崎先生)

ただし、中学進学を控えて不安や期待が入り混じっている時期に、難しい課題を出して

意欲を削いでしまつては逆効果だ。春休みに勉強して学力を付けさせるといふよりも、あくまでも毎日コツコツと机に向かう習慣を途切れさせないことがねらいだ。

そのため、問題の難易度と1日分の分量は、子どもが心理的に抵抗なく取り組めるものになっている。出題範囲は小学5、6年生での履



嬉野市立塩田中学校 教務主任 理科担当 「人の気持ちになつて生活できる生徒になつてほしい」



嬉野市立塩田中学校校長 宮崎憲太郎 「生徒には、自分と自分の周囲に感謝しつつ、逃げず、諦めない凛々しい人間に成長してほしい」

修内容が中心で、一部に小学3、4年生での履修内容も含まれる。小学校の履修内容のみで、中学校で学ぶ内容を先取りするようなものはない。活用力を問うような深く考えさせる問題もあえて入れず、小学校で習得した基礎・基本をしっかりと復習させている。

学校独自の「確認テスト」を入学4日後に実施

回収された「春休みの学習課題」は担任が確認し、解答集と共に生徒に返却する。ここまでは市内のどの中学校でも行われていることだ。同校はそこに、10年度、新たなプロセスを加えた。提出日の4日後に、同校独自の「確認テスト」を実施したのだ(図2)。

「中学入学当初の数日間は、どうしても学

級での取り扱い事項などが多く、授業のスタートが遅れがちになります。その間、学校で十分な勉強時間が取れない分を、テスト勉強を通して自宅で学習させようというのがねらいです」(宮崎先生)

「確認テスト」は、「春休みの学習課題」の中から出題される。設問数は4教科のバランスを見ながら配した33問で、解答時間は45分。担任は「春休みの学習課題」を返却する際に「この中から全く同じ問題を30題程度出すから勉強しておくように」と伝え、「春休みの学習課題」で間違えた箇所を十分復習してテストに臨むよう指示しておく。

採点は学年団全員で行い、1週間で終わらせる。既習の問題からの出題でもあるため、平均点は80点前後で、満点の生徒は2割程度だった。出題レベル

をあえてそうしているねらいを、宮崎憲太郎校長は次のように語る。

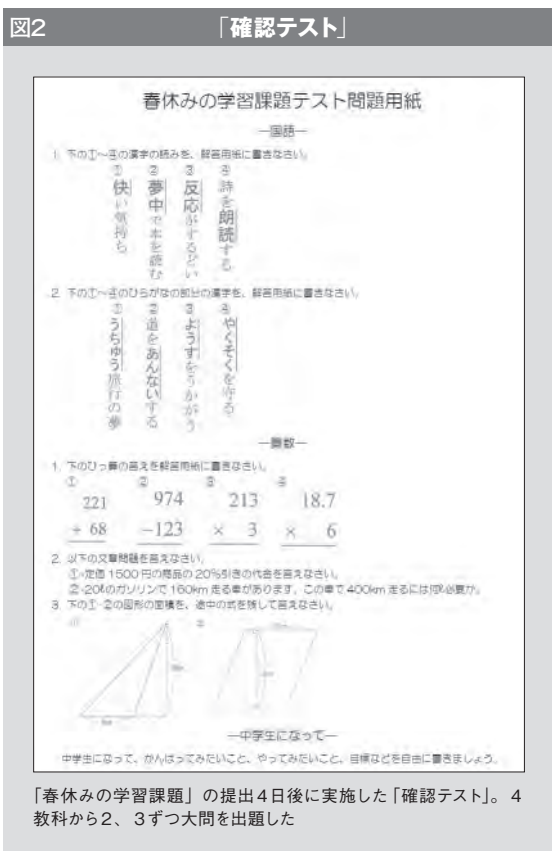
「中1ギャップで、いきなり学習意欲を失ってしまうのを防ぐためにも、新入生に『やれば出来る』という自信を付けてもらうのがこのテストのねらいです。小

学校で宿題を提出できなかった生徒が、『春休みの学習課題』を頑張って提出したように、多くの生徒は中学校入学を機に、心機一転して頑張ろうと思っています。この段階では、そうした前向きな気持ちを持ち続けてもらうことが大切です」

「確認テスト」の事前学習を通して中間テストの学習サイクルを体験

「確認テスト」に向けて、自分に足りない部分を計画的に復習してテストを受ける。4日間という短期間ではあるが、これは中学校の定期テスト対策と同様のサイクルだ。2学期制を採用する同校では、最初の定期テストが6月中旬以降と遅い。4月に行う「確認テスト」で、生徒にこのサイクルを早い段階で疑似体験させようというわけだ。

「『何を勉強したらよいか分からない』『どうやって勉強したらよいか分からない』と、中学校での勉強に悩む生徒もいます。そうした生徒でも、小学校の学習内容を勉強した『春休みの学習課題』から全く同じ問題がテストで出るならば、何をどう勉強すればよいか分かるでしょう。習った範囲をしっかりと家庭学習で定着させることが、自分の実力アップにつながるというサイクルは、中学校で必要とされる学習習慣の基本となります。以降の中学校の学習リズムをうまくつくれると思います」(宮崎先生)



「春休みの学習課題」の提出4日後に実施した「確認テスト」。4教科から2、3ずつ大問を出題した

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第3回

中学校導入期に学習習慣を定着させる

図3 「春休みの学習課題」学習計画と生活の記録

「早寝早起き」「朝食」「手洗い」「歯磨き」「勉強」が出来たかをチェックする欄を設け、生活習慣が乱れないように意識付ける。更に、中学校への意気込みを書く欄を設け、新生活への意欲を高めようとしている

学力下位層の実態を 早めに把握できるメリットも

教師にとっても「確認テスト」はメリットがある。指導上、丁寧に見取る必要がある生徒を、入学後すぐに把握できるからだ。

これまででも小学校の指導要録があったが、3段階評価のため、生徒の学力を大まかにしか把握できなかった。しかし、指導要録に加えて「確認テスト」の答案を参考にすることによって、生徒の学力をより詳しく把握できるようになった。「確認テスト」はやさしい問題のため、学力上位・中間層は満点かそれに近い点数を取るが、小学校段階でつまづきを抱えている学力下位層の生徒は点数が低

く、どこでつまづいているかも分かりやすい。授業中に注意してフォローしたり、チーム・ティーディングなどの際に注視すべき生徒を早期に把握できる。

「深く考えさせるような難しい問題を加えれば、もう少し学力を正確に把握できるかもしれない。しかし、問題が難しくなると取れなくなるとは、かえってマイナスだと考えています。また、「春休みの学習課題」には、学習用の問題だけでなく、毎日の生活記録を書き込む欄もあります(図3)。テスト結果と併せて担任がチェックすることで、日々の学習習慣でも重点的に指導する必要がありますがある生徒が見えてきます(宮崎校長)

「春休みの学習課題」を提出できるよう頑張る。続く「確認テスト」でその結果が表れる。そして教師は、重点的に指導が必要な生徒を早期に把握することが出来る。「春休みの学習課題」と「確認テスト」をセットで運用することで、

同校の導入期の指導は着実に向上したと言えるだろう。塩田中学校のこうした取り組みを嬉野市全域で展開できないかどうか、嬉野市教育委員会では検討している。

嬉野市教育委員会の支援策

ポトムアップで始まった 「春休みの学習課題」

塩田中学校が活用する「春休みの学習課題」は、嬉野市教育委員会(以下、市教委)の全体的な取り組みだ。市教委学校教育課の福田義紀課長によると、この取り組みの発端は、中学校現場独自の動きだったという。

「本市では10年度から小中連携教育事業の一環として、全市を3ブロックに分けて小中学校の教職員合同の研修会を開いています。このうちのひとつ、08年度から先行して始めていた嬉野中学校とその校区の小学校3校の研修会で、小学校卒業後の『学習の空白期



嬉野市教育委員会学校教育課課長 福田義紀 (Fukuda Yoshinori) 「学校を支える教育委員会でありたい」を本市教育委員会の第一コンセプトとして学校支援を進めています」

◎佐賀県嬉野市 嬉野市と塩田町が2006年に合併して誕生した佐賀県南西部の市。同県を代表する温泉地の一つ、嬉野温泉の温泉街のほかは、田園地帯が広がる。人口は約2万9000人。市立小学校は8校、市立中学校は4校。

間]に対する問題意識が持ち上がったのです」

話し合いの結果、嬉野中学校の校区の小学校の卒業生に春休みの課題を出すことになり、当時、嬉野中学校に勤務していた教師が率先して4教科分の課題を作成した。この教師は人事交流で小学校の教壇にも立った経験があり、小学校の学習内容にも精通していたからだ。中学校の観点から「少なくともこれくらいの内容を身に付けて入学してほしい」というレベルの問題案を作成し、校区の小学校教師と協議して完成させた。

「08年度は、嬉野中学校区独自の取り組みとして実施されましたが、せっかくの良い取り組みを一学区だけにとどめておくのはもったいない。全市で実施できないか検討が始まりました」(福田課長)

初年度の活動を踏まえ、各小・中学校の教務主任から成る「学力向上推進委員会」が問題を再検討。09年度用では、例えば算数の2けたと1けたの足し算など「簡単すぎる」と指摘された問題が削られた。また、新学習指導要領に対応するため、社会科で都道府県名と県庁所在地名を記入する問題や、子どもが全般的に苦手な分野を補強する問題を加えた。

「こうした作業を通して、中学校教師は小学校の現状を、小学校教師は中学校で求められる学力を、それぞれより深く知ることになりました。『中学入学時には最低限これだけは出来てほしい』という中学校教師の思い

と、『これだけは出来るようにして卒業させたい』という小学校教師の思いをすり合わせる場にもなったと思います」(福田課長)

中学校からのプレゼントとして渡される「春休みの学習課題」

「春休みの学習課題」は全市で次のような流れで活用されている。まず、市教委が全児童分の冊子を印刷し、各小学校に配布。小学校の卒業式前に6年生の担任が児童に配り、中学校入学後に担任の先生に提出するように説明する。この時点では解答集は渡さない。表紙に「分からないときは教科書を見たり、家の人に聞いたりして、がんばってみましょう」と記されているように、調べたり相談したりしながらでも、自力で解かせるためだ。ただ、普段から宿題などの課題をなかなか提出できない児童中にはいる。そこで、配布の際、小学校の担任が、この課題に取り組みむことで中学校の勉強にスムーズに入れることをしっかりと伝える。

「『これは、小学校からのプレゼントとして中学校に持って行ってください。中学校の先生が楽しみに待っているよ』といった具合に、中学校への橋渡しになる教材だと意識させるように教師がそれぞれ工夫しているようです」(福田課長)

冊子には、毎日の生活記録欄も設けられている。中学校では定期テスト前に学習と生活

の記録を実施しているケースが多いが、その簡易版といったところだ。保護者のチェック欄も設け、子どもが毎日コツコツと取り組むためのフォローを保護者から引き出す仕組みになっている。

学校の支援に徹し「確認テスト」の全市実施を目指す

「本市の方針は、学校を支援すること。現場からの『こうした』という声をうまく引き出し、その取り組みを支援することを大事にしています。市教委から『こうした』と投げ掛けると、どうしても『やらされて』と感じ、先生方の意欲が下がってしまいます」(福田課長)

そうした市教委の方針からか、今回の取り組みについても現場からは「負担になる」という声は上がっていないという。ゼロから作問する必要はなく、課題の印刷も市教委が担っているということもあるが、何よりそれが、現場発の動きから出てきた取り組みだからだろう。

市教委では、先に紹介した塩田中学校が、「春休みの学習課題」を踏まえた「確認テスト」を独自に実施したことを受け、これを全市で実施できないか検討を始めている。現場発想の良い取り組みを、市教委が支援して他校にも波及させるといふサイクルが、同市では回り始めている。

小学校時代から中学生の学習習慣を身に付ける「ジョイントプログラム」

京都府 京都市教育委員会・京都市立京都御池中学校

学校単位での取り組みに加え、近年では小・中学校の接続を意識した学習習慣の育成に、自治体ぐるみで取り組もうとする動きも出てきている。京都市教育委員会が全市で進める「ジョイントプログラム」「学習確認プログラム」と、その活用の一例として京都市立京都御池中学校の取り組みを紹介する。

課題

- 中学校で求められる学習スタイルへの移行がスムーズにいかない
- 中学校が新入生の学力を早期に把握しにくかった
- 小・中学校で共通する学力分析の基盤がなかった

実践

- 2008年から「ジョイントプログラム」を開始。小5で2回、小6で3回の確認テストを導入
- テスト前の事前学習教材とテスト後の事後学習教材を用意。事前学習→テスト本番→事後学習の学習サイクルを小学校時代から経験させる
- 小6の3回目の確認テストを中1の4月、入学直後に設定。小中の学びの橋渡しという位置付けに
- 中学校でも、ほぼ同じ形式の「学習確認プログラム」を3年間実施

成果

- 事前学習→テスト本番→事後学習というサイクルを小学校時代に体験させることによって、中学校の学習スタイルにスムーズに移行できるようになった
- 中学校が早期に新入生の学力を把握できるようになった
- 小中の教師のテストに対する考え方の違いが分かり、両者の連携の重要性を再確認できた
- プログラムに一貫性があるため、自学自習の習慣付けを継続的に行えるようになった

京都府京都市

○人口約146万人の政令指定都市。市立中学校は75校、市立小学校は177校。全国トップレベルの年間205日以上の授業日数を確保した上で、小中9年間一貫した指導に力を注ぐ。

京都市教育委員会

所在地◎〒604-8571
京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
担当課◎学校指導課小中一貫教育・学校運営企画担当
TEL ◎ 075-222-3801

School Data

◎3つの中学校が統合して2003（平成15）年に誕生。校舎は、高齢者福祉施設や保育所などとの複合施設として整備された。校区の御所南小学校、高倉小学校と小中一貫教育を展開。



校長◎廣瀬忠愛先生

生徒数◎ 638人 学級数◎22学級（うち特別支援学級3）

所在地◎〒604-0955 京都市中京区柳馬場通御池上る虎石町 45-3

TEL◎ 075-221-0414

URL◎ <http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index.php?id=201209>

公開研究会◎ 2010年11月12日（金）

小中一貫教育の中で
学習習慣を定着させる

小中一貫教育に全市で取り組む京都市。その推進に向け、小・中学校の学校段階を超えて、児童・生徒に学習習慣を定着させる活動に取り組む。小学校を対象とした「ジョイントプログラム」、中学校を対象とした「学習確認プログラム」だ。教育委員会学校指導課の安達敏明参与は次のように語る。

「本市でも児童・生徒の学習習慣をいかに確立するかは大きな課題です。中でも、学校段階において、一定の学習範囲を見越した上で、必要なことを自分で見つけて学ぶような学習スタイルを身に付けられるかどうかは、中学校の学習スタイルへの適応、ひいては高校入試に向けた学習をきちんと進められるかどうかを左右すると考えています。そこで、小学校段階から一定期間ごとにテストを行い、その事前・事後学習を繰り返すことで、中学校の学習にスムーズに移行できるようにプログラムを始めました」

このようなプログラムの必要性を最初に提言したのは、同市の中学校校長会だった。1993年、当時の文部省の方針を受けて業者テストが廃止された際、「学習習慣を定着

させるためには、一定期間ごとにテストを受けることがやはり必要である」との考えから、同市の校長会はそれ以降も独自のテストを年4回実施してきた。しかし、作問や採点を現職の教師が行っていたために、校務との両立や出題レベルのばらつきなどが課題となっていた。こうした状況を受け、市教委の支援と現職教師でつくる「教育研究会」の協力を得て、校長会を中心に取り組みが発展したのだ。

まず、2006年度に「学習確認プログラム」が始まった。これは、中学1年生で1回、中学2年生で3回、中学3年生で3回のテストを実施し、テスト前には既習事項を復習する「事前学習教材」、テスト後には個別の成績資料と達成不十分だった内容を振り返る「事後学習教材」を配布するというもの。08年度には同様の取り組みを小学校でも実施する「ジョイントプログラム」を開始。小学5年生で2回、小学6年生で3回のテストを行うものだが、小学6年生の3回目は中学1年生の4月に実施とした。小学校6年間の総復習となるテストを中学入学直後に行い、小中の学習習慣の接続を図るのがねらいだ(図1)。「中学校では、授業で習った複数の単元から自分に必要な部分を見つけて取り組むという学習スタイルが求められます。小学校では

事前学習→テスト→事後学習の
サイクルを小学校時代からつくる

「ジョイントプログラム」「学習確認プログラム」の概要

単元が終わるごとにテストを行いますから、何も知らなければ、中学校での学習スタイルの変化に戸惑ってしまいます。『ジョイントプログラム』によって、小学校高学年の段階から、中学校のスタイルを取り入れた学習に慣れさせることができます(安達参与)

「ジョイントプログラム」「学習確認プログラム」の概要

1~4年	小学校		中学校		
	5年	6年	1年	2年	3年
学習習慣・学習意欲の基礎づくり 家庭との連携	義務教育をつなぐ「ジョイントプログラム」 ねらい ・基礎基本の定着 内容 ・小5(2回)、小6(2回)、中1(1回)、国語・算数のテスト形式も含めた振り返りの学習 ・長期休業期間の学習支援 ・小中連携学習システム ・事前・事後の学習教材で自学学習を支援		自学学習支援のための「学習確認プログラム」 ねらい ・生徒の学習改善、自己点検と計画的復習 内容 ・中1(1回)、中2(3回)、中3(3回)、5教科テスト形式で自己分析 ・生徒自らが学習の定着状況と学ぶべき課題を定期的に確認し、計画的な学習を進める ・事前・事後の学習教材で自学学習を支援		

中学校**導入期**に**学習習慣**を定着させる

図2 「出題予定表とできたかなチェック表」

「出題予定表とできたかなチェック表」には、テストの時期と出題範囲が示され、事前学習→テスト→事後学習の学習サイクルの確立を促している

実施が可能になり、小・中学生の学力を共通の基準で分析できるようになった。その結果、小学校教師と中学校教師のテストに対する考え方の違いが次第に浮き彫りになってきたと、安達参与は語る。

「小学校の先生は、子どもに良い点数を取らせて自信を付けてあげようとする

ラム」の特徴は、既習事項の復習から確認テスト本番、テスト後の振り返りまでが一体となっていることだ。

年度当初にテストの年間出題予定表(図2)や事前学習用の教材が配られ、これらを使って確認テストに向けた勉強を進める。「ジョイントプログラム」では、確認テストの時期を夏休み明けや冬休み明けに設定し、事前学習用の教材は夏休みや春休みの宿題に位置付ける。長期休業中に学習習慣が崩れるのを防ぐためだ。更に、確認テスト後には事後学習用の教材を配布し、テストの復習に取り組みせる。

「事前・事後学習用教材の活用の仕方は、学校に任せています。例えば、事後学習用の教材は、答え合わせの後に宿題として課す学校もあれば、放課後学習の教材として使う学校もあります」(安達参与)

確認テストや事前・事後学習の教材は、教育研究会を中心に、指導主事らが加わって練り上げている。一方、かつての反省を踏まえ、教材の印刷や採点、データ処理などの作業は外部業者に委託する。これにより、採点作業が効率化され、受験後25日ほどで、学習の定着状況を細かく示した「個人成績資料」を解答题と共に返却できるようになった。

「事前学習→テスト→事後学習を円滑に繰り返すためには、採点や分析をできるだけ早く行うことが大切です。学校現場の負担も考慮して、一部の業務を外部業者に委託しました」(安達参与)

小学生の学習スタイルがプログラムにより変化

「ジョイントプログラム」学習確認プログラムによって全市で共通した確認テストの



京都市教育委員会学校指導課参与
安達敏明 Aida Kenichi Toshiki
「教師個人には長所も短所もあるが、教師集団として、教師の長所を子どもたちにつかり伝えたい」

発想が強いようです。そうなると、問題がどうしてもやさしくなり、平均点が80点前後になります。ところが中学校の先生は、高校入試という出口を視野に入れていたため、平均点が60点くらいになるテストを作ります。子どもにしてみれば、小学6年と中学1年の間に大きなギャップを感じて戸惑うことになりました。現在、小・中学校の教育研究会では、『ジョイントプログラム』の確認テストの平均点を段階的に下げるなど、うまく小中のつなぎになるような方法を模索しています」

プログラムを受けて、小学生の学習姿勢が変わってきたとの声が現場から聞かれるようになった。「ジョイントプログラム」では、事後学習よりも事前学習のボリュームが厚くなっている。そのため、小学生のうちから出題範囲を見て事前学習する姿勢が身に付いてきているというのだ。

「小学校側からは『子どもが中学校の学習にスムーズに入れたのかを知りたい』という声も挙がるようになりました。小・中学校の9年間を通して、学習習慣をしっかりと身に付けた児童・生徒を育てていきたいと考えています」(安達参与)

京都市立京都御池中学校の取り組み

課題だった新入生の学力把握が「ジョイントプログラム」で改善

京都市の小中一貫教育のパイロット校としての役割を担う京都御池中学校は、校区の御所南、高倉の両小学校と小中一貫教育を進めている。両小学校の児童は1年生から5年生まではそれぞれの小学校に通い、6年生からは同中学校の校舎で学ぶ。いわゆる「5・4制」に基づく小中一貫教育が展開されている。

そうした同校だけに、小学6年生の授業に中学校の教師がチーム・ティーチングで入ったり、小・中学校の教師が学習指導の方針について話し合ったりすることは、日常的に行われている。しかし、廣瀬忠愛校長によると、新入生の早期把握に基づく学習指導という点においては、全く問題がないわけではなかった。

「職員室では、『理科が苦手な学年だね』『この学年は数学のこのあたりが弱いですね』といったことが話題に上っていました。しかし、『この生徒はこの単元が弱い』といった生徒個々のレベルとなると、共通の話題とするような基盤がなく、なかなか具体的な話が深まりにくいところがありました」
そうした状況を変える契機となったのが、

先に紹介した「ジョイントプログラム」だ。早期に新入生の学力が把握できるようになり、その結果を基に学習習慣の定着を図ることが可能になった。

「以前、4月当初に教育研究会が実施していたテストは、結果が返却されるのが夏休み前までずれ込んでしまい、新入生一人ひとりの学力をすぐに把握するのは困難でした。しかし、『ジョイントプログラム』の確認テストの結果は、ゴールデンウィーク後までには返ってきます。生徒が小学校時代にどの教科のどのあたりでつまづいているかを把握し、いち早く手立てを打てるようになりました」（廣瀬校長）

9年一貫カリキュラムの改善にテスト結果を生かす

「ジョイントプログラム」の結果を受けた具体的な改善事項の一つは、同校ならではの小中一貫カリキュラムへの反映だ。小中一貫校の利点を生かし、同校では9年間を見通したカリキュラムを作成しているが、確認テストの結果を踏まえて、小学校教師と話し合いながら内容を調整できるようになった。

「例えば、生徒が苦手としている単元があれば、小学校でその単元の指導を手厚くして



京都市立京都御池中学校校長
廣瀬忠愛 Hirose Chuai
「生徒も教師も皆が笑顔になれる学校、子どもたちの能力を伸ばせる学校、皆で力を合わせられる学校にしたい」

もらったり、中学校入学後に、その単元の復習の時間を増やすといった対応が柔軟に出来るようになりました。本校の教科会には小学校6年生の担任にも入ってもらっています。共通のデータを基に話し合うことで、改善もスムーズに進められます」（廣瀬校長）

中学校の学習サイクルが小学校時代から体験できる

事前学習→テスト本番→事後学習という中学生として求められる学習サイクルを、新入生が小学校時代に体験できるようにすることも、「ジョイントプログラム」の成果の一つと廣瀬校長は言う。

「中学校では定期テストに向けて、複数の単元にわたる出題範囲の中から、自分で必要だと思ふ内容を判断して学習する姿勢が求められます。『ジョイントプログラム』では、テストの実施前にあらかじめ出題範囲が示されますから、児童も『広い出題範囲を自分で勉強していかなければ』という意識を持って臨みます。以前は、授業中に『小学校で出来たはずなのに、どうしてできないの』ということが度々ありましたが、『ジョイントプロ

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第3回

中学校導入期に学習習慣を定着させる

事後学習のための「フォローアップシート」を宿題として課した上で、担任が点検してい

「ジョイントプログラム」を引き継ぐ形で
行われる「学習確認プログラム」の活用にも、
同校は力を入れる。国語、社会、数学、理科、
英語の5教科について行われる確認テストに
向け、出題範囲を計画的に総復習し、達成状
況を定期的に確認するよう指導すること、
自学自習の習慣化に役立てている。
「生徒には年度当初に配布する『年間出題
予定表』や、教科ごとの細かい内容を記した
『教科別年間計画』などを活用して計画的な
学習を進めさせます。そして、確認テストの
実施後には、『個人成績資料』と共に事後学
習教材である『フォローアップシート』を配
布(図3)。弱点克服のための自己学習に取
り組むというサイクルをつくります。生徒は
小学校時代に『ジョイントプログラム』を受
けていますから、このプログラムが学習習慣
定着のためのものであることを理解していま
す。成績に反映されないからといって手を抜
くようなことはありません」(廣瀬校長)

「学習確認プログラム」で
小学校からの流れを切らさない

「学習確認プログラム」で 小学校からの流れを切らさない

「ジョイントプログラム」によって、広い範囲を総復習するこ
とが出来るので、知識の定着が促されている
と思います」

る。また、「個人成績資料」の返却もホーム

「生徒の個人成
績資料のほかに、
学校用資料とし
て生徒個人ごと
の出題内容別正
答率、小問別正
誤一覧などがあ
ります。これら
のデータの活用
を校内でどのよ
うに進めるのか
が今後の課題で
す。例えば、ひ
とくくりになら
ず、例え、ひ
とくくりになら
ず、例え、ひ

「生徒の個人成
績資料のほかに、
学校用資料とし
て生徒個人ごと
の出題内容別正
答率、小問別正
誤一覧などがあ
ります。これら
のデータの活用
を校内でどのよ
うに進めるのか
が今後の課題で
す。例えば、ひ
とくくりになら
ず、例え、ひ

「生徒の個人成
績資料のほかに、
学校用資料とし
て生徒個人ごと
の出題内容別正
答率、小問別正
誤一覧などがあ
ります。これら
のデータの活用
を校内でどのよ
うに進めるのか
が今後の課題で
す。例えば、ひ
とくくりになら
ず、例え、ひ

図3 「フォローアップシート」と「個人成績資料」

「フォローアップシート」は、テストの実施ごとに分冊になっており、
問題と解答・解説がまとめられている。このプリントに取り組み
れば、テスト範囲を復習できるというわけだ

生徒に配られるテストの成績資料。課題のある分野が一目で分
かる

「生徒の個人成
績資料のほかに、
学校用資料とし
て生徒個人ごと
の出題内容別正
答率、小問別正
誤一覧などがあ
ります。これら
のデータの活用
を校内でどのよ
うに進めるのか
が今後の課題で
す。例えば、ひ
とくくりになら
ず、例え、ひ

2010年度 Vol.2 特集「学力下位層が伸びる授業づくり」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*『VIEW21』中学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト(<http://benesse.jp/berd/>)でご覧いただけます。

◎全日本中学校長会総務部長の大江近先生のインタビューを興味深く読みました。自分が教師として駆け出しの頃感じていた、生徒の学力をいかに伸ばすかという視点、管理職としての集団経営という発想に、改めて考えさせられました。[長崎県/K中学校/O・S]

◎大江先生が強調されていた「学級集団のダイナミクスを活用する」という視点は不易なものであると考えています。どの記事も読んで面白く、ためになりました。[福島県/M中学校/K・T]

◎大竹市立大竹中学校が、5つの共通実践のそれぞれを5つのレベルに分け、少しでもレベルアップにつなげていこうとする姿勢が参考になりました。[山形県/N中学校/K・K]

◎「荒れた学校の立て直しは授業改善から」とはよく言われるところですが、大竹市立大竹中学校が、教師全員で協同体制を組み、システム化された取り組みを実践していることがとても参考になりました。[東京都/K中学校/W・F]

◎「5つの共通実践」の設定や「授業を変えることで生徒たちを変えていこう」とする大竹市立大竹中学校の姿勢に大きな共感を覚えるとともに、本校でもぜひ実行したいと思いました。また、課題整理のページも最初は戸惑いましたが、読み慣れると有用でとても良いページだと思いました。[栃木県/S中学校/W・A]

◎横須賀市立池上中学校が取り組んでいるグループ活動は、本校でも重視している活動であり、とても共感できる内容でした。[富山県/F中学校/O・M]

◎横須賀市立池上中学校の「授業記録」の活用方法をもう少し詳しく記述してほしいです。月2回の授業研究の時間をどうやって確保しているのかも気になります。記事を読んだだけでは納得できませんでした。[茨城県/Y中学校/K・T]

◎教科を超えた授業基準の育成法と、検証のための生徒による授業評価を実施している、大阪市立花乃井中学校の実践に刺激を受けました。[大阪府/K中学校/K・F]

◎大阪市立花乃井中学校で実践されていた「生徒による授業評価項目」が参考になりました。本校でも使ってみようと思います。[山口県/U中学校/M・M]

◎由利本荘市立大内中学校が、「学び残しをなくす」という発想から60分授業を取り入れたことに関心を持ちました。同時に、この授業を50分で実施できないかと考えています。[鳥取県/S中学校/N・Y]

◎50分を基本に授業時間を短くしたり、長くしたりすることはよくあることですが、生徒の集中力の持続という点から、由利本荘市立大内中学校の実践に興味を持ちました。[兵庫県/N中学校/S・K]

◎由利本荘市立大内中学校のように、60分授業を実施すると、よい意味で授業中に「休み」や「おしゃべり」する時間が生まれ、生徒がリフレッシュできるという面もあります。授業時間は確かに延びますが、うまくその時間を使うことで、生徒が集中しやすくなる面もあるのではないかと感じました。[神奈川県/S中学校/T・K]

編集後記

中学校における導入期の指導について考えることは、最終的には、小学校との連携を考えることにつながります。春休みの課題や、入学直後の復習テスト、合宿……。今回取り上げた実践は、いずれも小学校の理解があるからこそ成立しているものだと思います。対談で瀬上先生が指摘された「9年間を通して生徒を見る視点」の大切さを改めて感じました。(渡邊)

VIEW21 中学版 2010 Vol.3

2010年11月9日発行/通巻第307号

発行人 新井健一
 編集人 原 茂
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション
 Benesse教育研究開発センター
 印刷製本 大日本印刷(株)
 編集協力 (有)ペンダコ
 執筆協力 二宮良太、山口慎治
 撮影協力 川上一生、坂井公秋、南弘幸

◎お問い合わせ先

VIEW21編集部
 電話 **03-5371-1238**
 〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2
 東京オペラシティタワー 22階

©Benesse Corporation 2010